

熱田神宮



熱
田
神
宮



熱 田 神 宮 宮 域

目次

第一章 由	緒……………	五
一 祭	神……………	六
二 社	格……………	一〇
第二章 境内・境外	……………	一七
一 別宮・境内摂社・末社	……………	一八
二 境外摂社・末社	……………	二七
三 陵	墓……………	三三
四 別宮・摂末社一覽	……………	三六

第三章 建造物……………四一

一 御 垣 内……………四三

二 境内の建造物・その他……………四五

三 戦災焼失の建造物……………五九

第四章 造 営……………六三

一 戦前の造営……………六四

二 戦後の造営……………六九

第五章 祭典・神事……………七三

一 恒例祭典及び神事一覧……………七四

二 おもな祭典及び特殊神事……………七六

第六章 宝 物……………一〇七

一 書画・什器……………一〇八

二 木造舞楽面……………一一三

三 刀 剣……………一二八

四 和 鏡……………一三八

五 馬 具……………一四〇

六 古神宝類……………一三一

第七章 附属団体……………一三七

附録一 熱田神宮年表……………一四五

附録二 熱田神宮宮域図……………一五六

第一章

由

緒

一 祭 神

熱田大神

相殿 天照大神

素盞鳴尊

日本武尊

宮簀媛命

建稲種命

古くから「熱田さま」または「宮」とよばれて親しまれ、年間九百万を越える参拝の人々にぎわう熱田神宮は日本人のすべてが、無上の崇敬と信仰とをよせているお宮である。

うらなるあつたの海を高荷積み帆船ゆく見ゆいにしへ思ほゆ

餅売の翁をかこむ熱田の子肩まろまろと皆か肥えたり

歌は熱田にゆかりの深い歌人、依田秋圃の作だが、明治の頃の社頭のさまが眼の前に浮かぶ心地がする。神戸の浜から桑名あたりへ荷物をいっぱい積んでゆく白帆の船は「宮の渡し」（七里の渡し）のさかんな情景をしるばせ、また餅売の翁をかこんでいる熱田の子供たちが、まるまると肥えているというのは、周辺の人々の豊かなありさまをあらわしている。

祭神の「熱田大神」とは、三種の神器の一つである草薙神剣を御霊代としてよらせられる天照大神のことである。

「天照大神」は、日本の一番古い御祖先の神で天照といつて、至高至大の神格を、また日神と讃えて呼ばれるように、始めてこの世に神の道をあらわされ、また人々に慈しみの徳を授けられた神であり、日本国民統合の象徴である天皇の大御祖神である。なお皇位と共に伝わるべき由緒あるものとして、皇嗣が継承せられる「草薙神剣」は、三種の神器の一つであり、この神剣を奉斎する熱田神宮の尊貴性は、今日においてもいささかもかわらない。

相殿に坐す五柱の神は、「五座の大神」、「五神さま」とも親しんで呼ばれ、天照大神をは

じめ、草薙神剣とゆかりの深い神々として、これまで崇敬をあつめてきた。即ち「素盞鳴尊」は、天照大神の御弟神にあたられ、勇猛のきこえ高く、また、慈愛の徳にもあふれたまう神であり、出雲国簸の川上におもむかれた際に八岐大蛇より得られた神剣、天叢雲剣を天照大神に献上された。天照大神は、これを御孫瓊々杵尊の降臨の際に天璽之神宝として授けられ、歴代神璽として、同殿共床、宮中にとどめられたのである。

第十代崇神天皇の時に、鏡と剣とは宮中を出られ、いったん大和の笠縫邑にとどまれ第十一代垂仁天皇の二十五年、伊勢国五十鈴川上の地に鎮祭せられた。

第十二代景行天皇の皇子日本武尊と熱田神宮とは深いつながりがある。御父景行天皇から「形は我子なれど実は神人」との絶対の信任をお受けになっていた尊は、弱冠十六才で熊襲を平らげられ、ひき続き蝦夷征伐の天命をうけられた。この時尊はまず伊勢へおもむかれ、御姨倭姫命にいとまごいされたが、倭姫命はこの時神慮によって、神剣と燧囊とを尊に授けられ、「慎みて怠り給うな」とねんごろにさとされた。そこで尊は神剣を奉じ、勇んで尾張国へ入られ、吾湯市の火上の里（現在緑区大高町、熱田神宮摂社、氷上姉子神社の附近）にあった国造乎止與命の館にとどまれ、征討の事を議せられ、後、進んで三河・遠江を過ぎ、駿河国に至られた。時に、この国の賊らがいつわって、尊を野に誘い火を四方に放って失なわんとしたが、尊は燧をもつて向い火を点け、神剣の不思議な力で危難を免がれ、賊徒をことごとく

薙ぎ滅ぼされたので、これから神剣を草薙神剣と称するようになった。

さて東国をひらかれた後、再び尾張国造の館に留まれ、乎止與命の女宮寶媛命を妃とされ、ここで始めておしあわせな日々を過ごされていた。たまたま近江国伊吹山に賊あり威をふるっていると聞かれ、神剣を宮寶媛命のお手許に留めおかれたまま、伊吹へむかわせられた。ところが山中、毒氣にふれて病を得られ、いそいで都へ帰られる途中、伊勢国能褒野（三重県亀山市田村町）でなくなられたが、その御重態の際にも、神剣に深く心をかけられ

おとめの床のへにわがおきし剣の大刀

その大刀はや

と嘆かれたという。宮寶媛命は尊が常に身近に斎かれていた神剣が、大神よりの尊いおしるしであったことを畏まれ、深い御意志を重んじられ、かねて一族が



殿 拜

齋場としていた吾湯市の熱田に卜^う定めて、神剣を奉安せられた。熱田神宮創祀の起源は、実にこの時に始まる。今よりおよそ一千八百八十年前のことである。

「建稻種命」は乎止與命の御子で、宮簀媛命の兄にあたる神である。日本武尊の東征には一軍の將として従い、軍功があり、そのうえ宮簀媛命と力をあわせ、数々の神徳を示され、尾張地方繁栄の基礎をひらかれた。このように五柱の神はそれぞれ神剣と深い由縁を持たれている。

二 社 格

日本武尊の御遺志を奉じて熱田の宮に神剣を齎^{もたら}まつられた宮簀媛命の後、尾張氏の正統は相つぎ、尾張国造として、国を治めながら、さらに、熱田神宮の祠官として精神生活を指導し、国人の帰依を集めていた。「大化の改新」以後は山田・愛智両郡司となり、依然として祭祀の面にも力を尽していた。

天智天皇七年（六六八）新羅^{しんら}国の僧道行^{どうぎょう}がひそかに神剣を盗んで国へ帰ろうとしたが、風波のため難波に漂着し事なきをえた。以来神剣は皇居にとどめられたが、朱鳥元年（六八六）六月天武天皇御不例に際し、卜占によって神剣の祟^{たたか}であるとなし、勅命により神剣を熱田に奉遷^{ほうせん}せしめられた。これより社守七員がおかれ、内一人を長とし六人を別としている。伴

信友の「長等の山風」に引用せられている「熱田大神鎮座記」には、このことを記した後に、大宮や別宮諸神社を造営して十二月に新宮の遷宮の儀を行ったとあり、田島文書の貞享三年の「熱田神宮御遷宮諸事留」などには、朱鳥元年（六八六）遷宮が行われたと記している。

これ以後、尾張氏は神主、祝として奉仕してきたが、平城天皇大同二年（八〇七）二月齋部宿禰^{さくね}成^{なり}が例幣に預^{あづか}らんとすることを奏請し、嵯峨天皇弘仁十三年（八二二）六月には、従四位下を授けられ（日本紀略）、仁明天皇天長十年（八三三）六月従三位、神封十五戸を寄せ奉り、承和十四年（八四七）三月には勅して、神戸の百姓に公役を免ぜられた（太政官符）。文德天皇嘉祥三年九月神祇権少祐卜部業基をして賀瑞の由を告げしめられ、同年十月に正三位に叙せられた（文德実録）。その後、神階はさらに昇りつづけて、清和天皇貞観元年（八五九）正月従二位に叙し奉り、つづいて同二月正二位を賜い、右中弁大枝朝臣音人を以て神宝を奉らしめ（三代実録）、村上天皇康保三年（九六六）三月の記録には、すでに極位の正一位と称せられている（日本紀略）。これから考えると村上天皇以前において正一位に昇叙せられていたであろう。その後、寛仁元年（一〇一七）十月には一代一度の神宝奉納に際し、有力社五十八社の一つとして、熱田神宮もその列に加わり（左経記）、文治二年（一一八六）六月十二社奉幣に、伊勢の神宮以下の大社とともにその一つにつらなっていることは、当宮の崇敬のなみなみならぬことを物語っている。



皇太子殿下御参拝

の二節には、節別に僧六十四口を屈して金剛般若経一千巻を転読し、その布施供養には神封のものをもって充てしめたという。このような例はいずれの神社にもなく、ひとり熱田神宮に限られたことであった。

このことは神剣の稜威を畏まれて法薬のためにせられたのであろうが、その資源を神戸の収入に仰ぐことを「式」にのせたのは、特に国家の認めた重い行事であったためと考えられる。なお臨時祭式には、熱田神宮に属する神税の穀は、社用の外に用いることを許さず、社用にあてる場合も弁官の指揮を受けるように定められた。もともと神戸より出す租は神用に充当し残余は税として貯蔵し、神祇官の雑用に徴し、また神主に給せられるなど、国司の検校にまかせられていた。熱田神宮においては社用以外の支出を停め、管理は国司の手をはなれて弁官の権限に委ねられ、中央政府の聴許を経なければ処分のできないことを特に規定せられたのは、もとより神事



天皇皇后両陛下御参拝

延喜の制で「名神大社」に列せられているのは、本宮熱田神社をはじめ、日割御子、孫若御子、高座結御子の四社・四座で、名神祭に預かり、その神税穀は弁官の報を待つて社用に充てしめられた。

また延喜の制で「小社」に列せられているのは、上知我麻、下知我麻、御田、八剣、氷上姉子、青衾の六社・六座で、ともに国司の祭る神社とせられた。本宮以下はすべて神名式尾張国愛智郡の部に登載せられたが、当国百二十一座の官社のうち、八座の名神大社の半数、愛智郡にあつては十七座の総数のなかば以上におよぶ十座が、熱田神宮関係の神社によって占められている。

即ち当国第一の有勢の神社として社頭をとりまく熱田付近の地に、上下一般の信仰の対象となる幾多の社殿施設を集めた盛観は、これによって察することができる。これらは式のさだめるところによって、恒例臨時の奉幣に預かったのであるが、また臨時祭式によると毎年春秋



紀宮清子内親王殿下御参拝

近代に至り熱田神宮の御待遇は、まず明治元年（一八六八）六月にそれまでの熱田神社の社号を改め、神宮号を宣下せられ、「熱田神宮」と称しめられたことを始めとし、次いで同年十一月、著名の神社を勅祭神社、神祇官直支配神社、准勅祭神社の三等にわけられたとき、熱田神宮は神祇官直支配二十八社の一つに列せられた。同三年（一八七〇）六月、神祇官直支配社の名称は、官裁社と改められた。翌四年（一八七一）五月、官社諸社の区別を立てられたとき、官幣大社二十九社のうちに列せられた。つづいて大正六年（一九一七）二月一日勅祭社に治定せられた。これよりさき明治十四年（一八八二）五月、熱田神宮と出雲大社との二社のみに宮司以外に権宮司を置く制度が設けられた。同二十三年（一九〇〇）三月、熱田神宮だけに職制として宮司、権宮司、禰宜（以上各一名）主典五名、宮掌五名が置かれ、同三十五年（一九〇二）には衛士

尊重の精神よりでたことである。然も皇城の鎮護として公家の尊崇のあつて上下賀茂両社とともに、熱田神宮のみをかく定められたことは、諸社に卓越した尊崇を示しているに外ならない。撰末社についても、「尾張国神名帳」「熱田講式」「粟田文書」によると前述の延喜式に見えない大福田大菩薩、素戔雄名神、今彦名神、乙子名神、永上名神、日長名神、水向天神、左右八百萬神、火神、十二社が見えている。これらの中にはもとから存したものもあるが、多くはその後における信仰崇敬による勧請と考えられる。

かくて尾張国内神名帳に熱田皇太神宮、熱田講式には熱田大神宮の尊称をもって記され、さらに諸記録によると、「百王鎮護」、「宗廟萬民与楽社壇」あるいは「日本第三の鎮守」とあり、又境内四面八町と見えていることなどと相まって、その宗教的信仰的な発展と、社会的経済的な基盤のいかに強大であったかを思わせる。例えば後鳥羽天皇建久五年（一一九四）九月源頼朝は神馬及剣を奉り、四条天皇暦仁元年（一二三八）十月、將軍藤原頼経は参詣の上、奉幣を行っている。社領は仁明天皇以後、歴代寄進の地頗る多く、中世において権宮司家領ですら田畠五百六十二町余をもつといわれ、その社領の総高を比較するならば、熱田神宮に匹敵するものは稀有であろう。後、徳川幕府から大宮司領として七〇〇余石の朱印領を寄せられている。本宮の権威に加えるに、社領をもつて威を張った当時の熱田神宮がいかに重大視せられたかは当然のことであろう。

長および衛士を置かれるに至った。宮掌と衛士の職員を置くことは、伊勢の神宮以外にはないことで、待遇上においても、次第に伊勢に次ぐ神社であることが実現されていた。

昭和二十年（一九四五）十二月十五日、占領軍より神道指令が発せられ、伊勢の神宮をはじめ、全国の神社制度は根本的な変革を命ぜられた。すべての神宮神社と国家との制度的関連は断絶せしめられ、その公法上の地位は全く消失した。けだし国史はじまって以来の大変革である。熱田神宮ももとより例外でなく、官幣大社の社格はいうまでもなく公法人たる地位もなくなり、全くの私法人たる宗教法人としてのみその存続を許されることとなった。

このような条件の下に、戦災復興の難事業は進められた。熱田神宮のあゆみは極めて多端であった。然し近年社会状況の安定にともない、神社制度は正のための運動、特に神器奉祀の神宮としてふさわしい真姿顕現のための運動が積極的に進められている。

第二章 境内・境外

一 別宮・境内摂社・末社

熱田神宮の境内は約十九万平方メートル（約五万七千五百坪）境外を合せると約三十万平方メートル（約九万坪）の広さがある。神苑の樹木は「熱田神宮の社叢」として、学術上価値高い生物群集及び生物の所在地である。文化庁の調査でも「疎林ではあるが、数少ない尾張地方における常緑広葉樹林の一つである。クスノキ、タブノキなどの老樹が多く、林下にはウラシマソウ、ヤマアイなども残っている」とされており、比較的広葉樹がよく育ち、ことに楠は巨木が多く、中の数本は樹令千年前後といわれている。

よく知られた木には、花が咲いても実のならない「ならずの梅」。茶人の愛好する「太郎庵椿」。弘法大師のお手植と伝える「七本楠」などがある。ならずの梅は享禄古図にも描かれている古木で、一度も実をつけたことのない奇木である。太郎庵椿は別宮境内にある椿の珍木で、初代高田太郎庵という茶人が、ひこばえを自宅の庭に移し植えて珍重したのでこの名があるという、全国に数少ない名木である。昔この境内を指して「蓬が島」ともいっている。これは、長命不死の仙人が住む理想郷を蓬菜という信仰があったので、熱田神宮は富士、熊野とともに蓬

菜の一つとして尊ばれていた記録もあり、このような呼名が残ったのであろう。名古屋城を一名「蓬左城」というのも、京都から見て熱田神宮、即ち蓬菜宮の左という位置からきている。

さてこの境内には、本宮のほか、別宮一社、摂社八社、末社十八社が奉祀せられている。

別宮 八剣宮

正面参道を入って一の鳥居の手前を左に入ったところに南面して鎮座。祭神は本宮と御同前。鎮祭は元明天皇和銅元年（七〇八）で、この時新造の宝剣を納められた。延喜式内の小社で愛智郡八剣神社とある。本国帳貞治本には「正一位八剣名神」、同元龜本に「正一位八剣大明神」とあるが、明治十三年一月、別宮・八剣宮と改められた。古来別宮、外宮、下ノ宮などの称もあった。社殿も本宮とほぼ同型式で、



八 剣 宮

年中の祭儀も同様に執行せられている。

古くは現在地より稍東方に鎮座せられていたが、明治二十六年の改造の際現位置に移された。また明治天皇御東幸の時に、内侍所は当宮渡殿に仮泊せられた。

摂社 一之御前神社

本宮の西北隅に南面して鎮座。天照大神の荒魂をまつる。荒魂とは活動的猛進的な方面の作用をふくみ勇猛、進取のはたらきをされる神霊をいう。伊勢内宮の荒祭宮、外宮の高宮（多賀宮）にそれぞれ荒魂をまつるように当御前も奉祀せられている。

摂社 日割御子神社

正面参道入口の東側、南門の少し東方に南面して鎮座。祭神は天忍穗耳尊。延喜式内の名神大社である。また祭神は正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊とも申しあげ、天照大神の御子で瓊々杵尊の御父である。天火明命は天忍穗耳尊の御子にあたり、高倉下命は御孫にあたる。この社地は太古水際に張りでた洲崎の名残で干崎といわれていた。孝安天皇の御宇に創立、正応四年（一二九一）貞享三年（一六八六）元文五年（一七四〇）にそれぞれ修造の記録があり、さらに、昭和二年五月に修理せられたが戦災のため焼失、昭和五十七年四月竣工。

摂社 孫若御子神社

日割御子神社のやや北方に南面して鎮座。延喜式内の名神大社であり、祭神は天忍穗耳尊の

御子天火明命で尾張氏の始祖である。天照国照火明命、天照玉命ともいう。ほあかりとは、ほが赤くなるという意味で、稲穂による尊称であろう。当社はもと旧鎮皇門内の御田社の西にあったのを、明治七年現在地にうつされた。

摂社 南新宮社

孫若御子神社の東北方に西面して鎮座。祭神は須佐之男命。六月五日を祭日として南新宮社祭を行う。かつて高さ十二間余りの大山車の上に五間余の大松をたて、車輪の直径四尺五寸、厚さ一尺一寸のものを曳きまわし豪華を誇ったが、明治に入り電線が架せられるようになってから自然廃止せられた。貞享三年重建の記録あり。最近では平成四年に重葺し、丹が塗替えられた。

摂社 御田神社

土用殿の東方、神楽殿の東側より北の清水社へ通ずる参道の中程に西面して鎮座。祭神は大天神で、五穀豊穡の守護神である。式内の小社で六月十八日を祭日とし御田植祭が行われる。

なおこの社の祈年、新嘗の両祭の時に奉る神饌はまず鳥に食べさせる信仰が残っており、御供の菜をホーホーと鳥を呼びながら土用殿の屋根の上に投げあげる。昔は鳥がとんできて御供を食べなければ、祭典が行われなかったという。

摂社 下知我麻神社

境内西北隅に西面して鎮座。祭神は真敷刀俣命で、乎止與命の妃、即ち宮簀媛命の母神にあたる。式内の小社で俗に紀太夫社という。参拝するには一旦境外へでなくてはならない。道路をはさみ、西側には頼朝公誕生地といわれる誓願寺がある。旧事紀天孫本紀に、「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊中略十一世の孫乎止與命。此命は尾張の大印岐の女真敷刀俣を妻とし一男を生ましむ。十二世孫建稲種命」と見える。なおこの神社には古くから旅行安全の信仰がある。

摂社 上知我麻神社

正面参道第一鳥居の左側に東面して鎮座。祭神は尾張国造、乎止與命で宮簀媛命の父神にあたる。式内の小社で俗に源太夫社という。もと熱田区市場町にあったが、都市計画の道路区域内に入るため昭和二十四年十二月二日に正参道入口左側に移築着工し三十一日正遷座祭を執行。さらに昭和四十年十二月二十五日新本殿が竣工、正遷座祭が盛大に執行された。総松素木造屋根銅板葺の流造風形式である。

境内に末社「大國主社」、「事代主社」があり、一月五日を祭日とし「初えびす」の名で知られる。

鎮座年代は不明であるが延喜式にもあらわれており、尊命記集説には、「此神は熱田の地主の神だから云々、」とあり、また熱田宮旧記には、「地主の神なる故に土地の人民所当を納め海浜

より大小の魚を貢進する……」とあって国造であつた乎止與命の故事を伝えている。

なお当社のことを俗に「知恵の文珠さま」といい、知恵の神様とたたえて崇敬するものも甚だ多い。

摂社 龍神社

御田神社のやや南方に西面して鎮座。祭神は吉備武彦命、大伴武日命で日本書紀景行天皇紀に見え、共に日本武尊の東征にしたがつた將軍である。

末社 大幸田神社

旧海上門のまえ、直ぐ東側に南面して鎮座。祭神は五穀をはじめ食物を司る宇迦之御魂神である。一説に「福の神」即ち富貴榮達を祈る神ともいう。

末社 清水社



上知我麻神社

御田神社の北方に南面して鎮座。祭神は罔象女神で水を司る神である。伊弉諾尊、伊弉册尊の御子である。俗に「お清水さま」と呼ばれ、ここに湧いている水で眼を洗えば眼がよくなり、肌を洗えば肌がきれいになるという信仰がある。

末社 東八百萬神社

末社 西八百萬神社

三の鳥居の南に、正面参道をはさんで向い合つて鎮座。祭神は熱田を中心とする東西両国の八百萬神である。古くは左八百萬神社右八百萬神社ともいった。

末社 大國主社

末社 事代主社

摂社の上知我麻神社の左右に相並び、大國主命、事代主命をそれぞれまつる。

末社 内天神社

大幸田神社の南に参道をはさんで西面して鎮座。祭神は少彦名命で、大國主命と共に国土經營につとめられ、医薬の道を教えられた神である。

なおこの内天神社には社殿がなく、明治二十六年改造前は海上門の内に建っていたので「内天神」という名があり、当時から榊の大木が祭つてあったという。

末社 乙子社

末社 姉子神社
末社 今彦神社
末社 水向神社
末社 素盞鳴神社
末社 日長神社

六社あるので古くから「六末社」ともいい、内天神社の南に六社が並んで西面して鎮座。祭神は日本武尊及び尾張国造関係の神々で、乙子社は弟彦連、姉子神社は宮實媛命、今彦神社は建稲種命、水向神社は日本武尊の妃弟橘媛命、日長神社は乎止與命の子日長命をそれぞれ奉斎する。素盞鳴神社は社名にも見られる通り素盞鳴尊である。

末社 楠御前社

正面参道の中程、参道の東側に接し南面して鎮座。祭神は伊弉諾尊、伊弉册尊である。俗に「子安の神」または「お楠さま」と呼ばれ、いろいろの病気を治し、殊に安産の神としての信仰が厚い。小鳥居に干支や氏名を書いて奉献すると願い事が成就するといわれる。内天神社と同じく社殿がなく、瑞垣をめぐらしたなかに楠の神木がまつられている。なお問答雜錄に「社の神也、古楠樹を主とす」とあり、熱田百録に「靈木三株」として所謂、西門外の松、南門内の梅と共にこの楠のことをのせ、「此の木は熱田神社四至九町の中央にあり此地の宜処の樹

なり」とある。

末社 菅原社

西門鳥居を入って北寄りに西面して鎮座。祭神は菅原道真公である。一に「外天神」ともいわれ、ここにお詣りして入学進学祈願する者が多い。また下知我麻神社の石を戴いて帰り、願がかなうと倍の大きさの石をここへ返して感謝するという奇習もある。

末社 徹社

楠御前社の北方に西面して鎮座。祭神は天照大神の和魂である。和魂は荒魂とは対称的に静かな温和な作用をふくみ和平、柔順のはたらきをされる神霊をいう。

末社 八子社

摂社南新宮社と相並び鎮座。祭神は天忍穗耳尊、天穗日命、天津彦根命、活津彦根命、熊野

機樟日命、田心姫命、市杵島姫命、湍津姫命の五男三女の八神である。

末社 曾志茂利社

八子社に隣し南面して鎮座。祭神は「居茂利大神」といい、素盞鳴尊の別名である。

二 境外摂社・末社

神宮の境外、いわゆる飛地境内にある摂社は四社、末社は十三社である。

摂社 高座結御子神社

熱田区高蔵町に南面して鎮座、祭神は饒速日命の子高倉下命で、鎮座は本宮とほぼ同年といわれ延喜式には名神大社と見えている。本国帳貞治本に「従二位高蔵神社」同元龜本に「正二



高座結御子神社



菅原社

位高座明神」とある。

本殿の造営に就いては、信長も造営をし、蜂須賀家政が修理を加え、貞享三年に改築した等の記録があるが戦災により焼失。昭和三十六年三月復興に着工、昭和三十八年五月竣工、遷座祭を行った。

本殿の建築様式は、旧本殿に準じて復興せられた。古来樹木が繁茂しているので俗に高蔵の森と呼ばれている。境内には四末社がある。

鉾取社 祭神 鉾 取 神

新宮社 祭神 素 盞 鳴 尊

御井社 祭神 御 井 神

稲荷社 祭神 宇迦之御魂神

祭神の鉾取神は武内宿禰、御井神は木俣神ともいふ大國主命の御子、宇迦之御魂神は保食神とも倉稲種神ともいふ素盞鳴尊の御子である。



高座子預祭のにぎわい

例祭は六月一日で「子育て神」、子供をお預り下さる神として信仰が厚く、数万の人々が子供を伴って参拝する。この日御井社の井戸を拝むと「虫封じ」になるという特殊信仰もあり俗に高座の「井戸のぞき」として有名である。

摂社 氷上姉子神社

緑区大高町火上山、即ち上代の火上の里に鎮座。祭神は宮簀媛命である。仲哀天皇四年創建、延喜式内の小社である。

境内は丘陵形勝の地を占め、日本武尊が東方に向われる際、この火上にある尾張国造乎止與命の館にとどまられた。尊の死後、媛は火上の里に留めおかれた草薙神剣をいまの熱田の社地に奉斎せられた。

当社は仲哀天皇四年、館趾（現在の末社、元宮）に創設、持統天皇四年（六九〇）に現在地に遷座。貞享三年綱吉が社殿を造営、現在の本殿は明治二十六年改造以前の別宮八剣宮の本殿を移築したものである。昭和六十一年拝殿ほか改築。神宮の摂社であり大高町の氏神である。

末社として次の三社がある。

元宮 祭神 宮簀媛命

神明社 祭神 天照大神

玉根社 祭神 少彦名命

十月第一日曜日を例祭とし、本社において例祭を執行するが、この外三月最終日曜日に太々神楽、五月六日に頭人祭、六月第四日曜日に大高斎田御田植祭を執行する。永徳二年（一三八二）火災により災害を蒙ったのでこれまで火高地又は火高といっていた火の字を忌んで、火上を氷上とし、火高を大高に改めたという。

摂社 青衾神社

熱田区白鳥二丁目に東面して鎮座。祭神は天道日女命であり、饒速日命の妃で、高倉下命の母にあたる方である。延喜式内の小社であるが、社殿は戦災により焼失した。昭和四十三年二月再興せられ、仲秋名月の日を祭日とし、青衾神社祭を執行する。

摂社 松垢社

熱田区神宮二丁目に東面して鎮座。祭神は宮簀媛命である。上古ここに清流があり、日本武尊が到られた時、宮簀媛命は布を晒されていた。氷上への道を尊は問われたが、媛が聞えないふりをし、答えられなかったという故事より、「耳の神様」といわれ、お詣りすると耳が良くなるという信仰がある。

末社 南楠社

熱田区伝馬一丁目に鎮座。祭神は別宮と御同前である。かつて一本の楠の老樹があり、氷上の里から熱田へ御遷座のとき、神剣の一時休御し給うた地であると伝える。

末社 鈴之御前社

熱田区伝馬二丁目に北面して鎮座。祭神は天鈿女命である。俗に「鈴の宮」といわれ東海道の旅人が熱田に入るときは、この社で祓を受けてから本宮へ詣ることになっていた。七月三十一日の例祭には「茅の輪くぐり」の神事があって賑わう。

当社は戦災後、都市計画等の関係もあってしばらく旧社地近く御飯屋のまま奉斎されていたが、新たに社地を定め、昭和三十五年四月地鎮祭を、七月三十日遷座祭を執行した。

末社 浮島社

瑞穂区浮島町に南面して鎮座。祭神は天穂日命である。社名は、往古より社のまわりが洪水高潮等の水災に遭うことがあっても、このみ浮き上って水災にあわなかったことから名付けられたという。

末社 影向間社

熱田区白鳥二丁目の旧政所内に南面して鎮座。熱田大神の御分霊をまつる。もと旧神宮神職田島家の宅地内にあったが、維新後宅地、土地の際、当所に遷しまつたという。

もともと影向間社というのは、神剣が皇居より遷座の際、修築に着手したばかりであった本宮に入御できないので宮簀媛命の故事にならって、田島家邸内一部を影向間と仮に定め、その御床の間に奉安し御守護申し上げた由緒にもとづくもので、入御後も、社殿は田島家の邸内に残

されて奉祀せられていたという。

末社 朝苧社

緑区大高町東姥神に鎮座。火上老婆霊をまつる。社名の朝苧は麻苧のカナであるといい、俗に老姥神様と唱えて、産婦の乳の出ないものが祈って効験があり、近在では「乳の神」といって尊崇している。

末社 琴瀬山神社

愛知県北設楽郡東栄町に鎮座。熱田神宮の備林である琴瀬山地内の山頂に、熱田大神、大山津見神、久久能智神の三神を奉斎する。昭和四十五年六月二十八日鎮座祭を執行、以後この日を例祭日と定め祭典を奉仕している。

三 陵 墓

白鳥御陵

本宮の西北一〇〇〇メートル、熱田区白鳥一丁目の丘陵に築かれた前方後円型の古墳で、四



白鳥御陵

囲に濠を設けたあとがある。明治九年六月、熱田神宮の所屬地と定められたが、戦後市の管理に移った。元禄に編められた熱田町旧記によると「東西十四間（二五メートル）南北二十六間（四六メートル）陵の上に社あり。法持寺の鎮守なり云々」とある。

さらに、尾張名所図会によると、天保八年（一八三七）八月の大風で、陵上の大樹吹き倒れ、土石を芻返し、墳中より縦四メートル、横一・五メートル、深さ二メートルの石廊の蓋石五枚が現われ、中に太刀、鉾、六鈴鏡、子持斎瓮、副葬品の数々が発見された。その時尾張藩から出向いてもとのままに埋めたとい、図会附録にはその図が収められている。

この古墳は日本武尊の御陵であるともいわれる。尊は伊勢能褒野に薨せられてから、白鳥と

化して、熱田に飛び来り、降り立たれた地を白鳥御陵と名づけられたという説によるものと見える。

なお、この境内入口に「しきしまのやまとこひしみ白とりのかけりいましあところこれ」という本居宣長の歌碑がある。宣長が御陵を訪れたときの作である。

陀武夫御墓

白鳥御陵の北方約三〇〇メートル、神宮公園にあり、規模の大きいこと、割合に完全な形を残している点において東海随一といわれる大古墳で、前方後円墳である。姉山とも、断夫山とも呼び、宮簀媛命の御墓と伝えられるように、尾張氏の関係と見てよい古墳で、昔から旧大宮司千秋家で奉仕してきた。明治九年（一八七六）熱田神宮の所屬地と定められたが、現在は、県



断 夫 山

の管理に係る。尾張名所図会によると、三月三日桃の節句の一日のみ、山に登ることを許され人々は弁当持参で楽しんだという。

毎年五月八日には白鳥御陵と共に御陵墓祭が行われる。

境内別宮・摂末社一覽

別宮	区 分	宮社名		祭神	
摂社					
八之御前神社	宮	本宮御同前	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
一之御前神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
日割御子神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
孫若御子神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
南新宮	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
御田新宮	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
下知我麻神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
龍知我麻神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
上知我麻神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
大幸田神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
清水神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂
東八百萬神社	宮	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂	天照大神荒魂

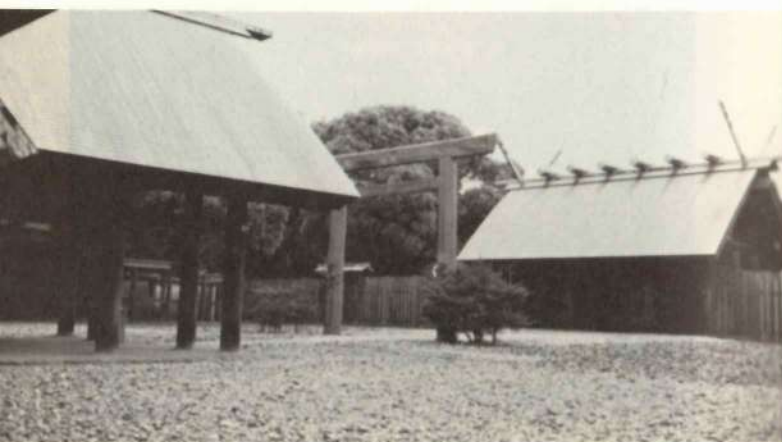
西八百萬神社	同	西國坐八百萬神	少彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
乙子子神	同	乙子子神	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
内天子神	同	内天子神	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
今彦神	同	今彦神	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
水向神	同	水向神	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
素盞鳴神	同	素盞鳴神	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
日長神	同	日長神	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
楠御前	同	楠御前	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
菅原	同	菅原	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
徹	同	徹	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
八子	同	八子	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神
曾志茂利社	同	曾志茂利社	弟彦名命	弟彦名命	宮寶媛命	建稻種媛命	弟橋媛命	素盞鳴尊	日長命	伊弉諾尊	伊弉諾尊	菅原真公	天照大神和魂	天忍穗耳尊	天穗日命	天津彦根命	活津彦根命	居茂利大神

合計	別宮	一	撰社	一二	末社	三一	同	同	同	同	同	同	末	同	撰	同	同	
							社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社
							琴	朝	影	浮	鈴	南	松	青	玉	神		
							瀨		向		之		衾					
							山	芋	島	御	楠	妬	神	根	明			
							神											
							社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	社	
							久	大	熱	火	熱	天	天	別	宮	天	少	天
							久	山	上	田	田	穂	鈿	宮	寶	道	彦	照
							能	津	老	大	日	女	御	媛	日	名	大	
							智	見	婆	大	命	命	同	命	女	命	命	
							神	神	靈	神	命	命	前	命	命	命	神	

境外撰末社一覽											
區分	宮社名					祭神					
撰社	高座結御子神社	銚取社	新宮社	御井社	稻荷社	水上姉子神社	元宮	撰社	末社	撰社	末社
撰社	高倉下命	銚取神	素盞鳴尊	御井神	宇迦之御魂神	宮簀媛命	宮簀媛命	撰社	末社	撰社	末社

同	同	別宮 一 撰社 八 末社 一八
事代主社	大國主社	
事代主社	大國主社	
事代主命	大國主命	

第三章 建造物



中 重



一 御 垣 内

本宮の拝所は外玉垣御門の前であり、外玉垣御門から御垣内を拝すると、一番奥に最も高く千木・勝男木の見える社殿が「本殿」で熱田大神はここに鎮まります。

構造は神明造の銅板葺である。その本殿の両側に、「東宝殿」・「西宝殿」がある。この御垣内に内から順に「瑞垣」・「内玉垣」・「外玉垣」の垣があり、垣の各南正面には神明造の門がある。内玉垣と外玉垣との間の広場を「中重」といい、正面中程に立っているのを中重鳥居という。例祭をはじめ祭典の多くはこの中重

の版について行われる。

翼廊の南、及び北の鳥居の内に宿衛舎がある。なお別宮敷地内の建物も宝殿と宿衛舎を欠く外は全く本宮と同様で、単にその規模が小であるというにとどまる。

本 殿

昭和三十年十月十二日改築。面積六〇、七平方米。規模、構造は伊勢の神宮と略同様である。但し屋根は銅板葺とし、堀立柱は杵石据えとされている。

拝 殿

昭和二十九年十一月十五日竣工。面積二二九、一平方米。通常、外玉垣御門並四尋殿を拝



新年群参

殿と称し、付接する東西翼廊、祭具所を含む神明風の構造である。改造以前は南面に板垣鳥居、板垣があったがそれを外し現在の様式に変更したのは、年頭を初めとして参拝者を受け入れるためには手狭となったためであり、さらに板垣の代りに翼廊を付し、祭典の「参列」の場合の便がはかられている。

二 境内の建造物・その他

境内のおもな建物は次の通りである。

神符授与所

昭和三十年十一月十日竣工。面積三五四、四平方米。構造は切妻造鉄筋コンクリート建て、外部は素木の桧を用いた神明風である。

神楽殿

昭和三十四年九月三十日竣工。面積四三四、九平方米。構造は入母屋造風鉄筋コンクリート建て、正面には大唐破風の向拝が鬼板に桐竹紋を輝かせて構え、特に内部の神座、祭場には素木の桧を用いている。なお願人席は椅子で、固定席二百五十六名、補助席を加え三百名を収容し得る。



神符授与所

勅使館

昭和三十年六月平家建入母屋木造瓦葺（約二四五平方米）で建てられたが、昭和五十四年五月鉄筋コンクリート入母屋造、屋根銅板葺（約四四七平方米）として改築竣工。勅使斎館にあてられるほか、貴賓館としての役割も果している。

参拝者休憩所（北）

昭和二十四年十月平家建入母屋木造瓦葺（約一七四平方米）で戦後第一に建てられたが、平成元年七月一日鉄筋コンクリート平家入母屋造、屋根銅板葺（約三百平方米）として改築竣工。案内コーナー、各種展示コーナーの役割も果している。

参拝者休憩所（南）

昭和四十三年十月一日竣工。平家建、屋根鋳葺。面積一九八平方米。林苑の景観を利用した瀟洒な建物で、また見晴しをよくするために、

池の上にベランダをだしている。

軽飲食、喫茶、売店の設備があり、参拝者の便を図っている。昭和五十四年に附近一帯の修景工事を行い、庭園として参拝者の憩の場にされている。

宮 庁

昭和二十年戦災により焼失。昭和二十七年四月三十日、面積六十七平方米、平家建入母屋木造瓦葺の仮宮庁を建設。昭和四十六年三月解体され、昭和四十七年十二月竣工。面積約一、四三四平方米、地上二階、地下一階の鉄筋コンクリート、和風流造、屋根銅板葺。事務室の外、講堂、会議室、応接室などを容れた施設として参集所跡地に建設された。

斎 館

昭和四十二年十月一日竣工。鉄筋コンクリー



宮 庁



勅 使 館



斎 館

ト造の地上一階、地下二階建の建物で、外観は和風流造、屋根銅板葺である。

各室のおもなものと、一階は斎室で、宮司斎室、大斎室、貴賓室、応接室、客室、地下一階は、各種集會に使用される洋室二室、地下二階は、什器の格納庫等がある。

會 館

昭和四十七年三月、鉄筋コンクリート造、二階建、地下一階(約三、五二九平方米)で竣工。更に昭和五十四年八月に鉄筋コンクリート造並びに鉄骨造平屋建、(約一、九一一平方米)屋根切妻造、銅板葺で増築竣工。結婚式場、大ロビー、控室、披露宴室、バーテイ、集會等に使用される大小多数の洋室、写場、衣裳室、化粧室、男・女更衣室、受付、事務室、調理室がある。



會 館 (結婚式場)

能 楽 殿

昭和三十年十一月十六日竣工。平成九年八月改修。面積一、〇七六平方米。東参道南寄りに建てられた鉄筋コンクリート二階建て定員三百五十四席。能楽のみならず古典芸能にも利用されている。

文 化 殿

昭和四十一年四月竣工。面積一、九二九平方米。構造は鉄筋コンクリート造で、校倉風の外観をもつ壁体を四方にめぐらし屋根は軒出を殊に深くし、軒先に化粧樑を見せ、軒付も隅に反りをもたせて陸屋根の感じを和げ、床は湿気を防ぐ古代建築の長所を採って高床式としている。

各室のおもなものとして、一階に熱田神宮宝物館(収蔵庫並展示室)二室。舞台付講堂。事務室。二階に宝物収蔵庫、熱田文庫(書庫及閱

覧室）会議室等がある。これら各室は通風、換気、採光、防湿（温度湿度調節、冷暖房、防火）の諸施設をもっている。宝物館は、博物館として登録され、館長、学芸員を置いて、特別展、平常展、講演、出版等の事業を通じて、文化の向上につとめている。

宝物館別館

昭和五十年六月二日竣工。面積九十二平方米。構造は鉄筋コンクリート造、平屋建て、板倉風、陸屋根の外観をもち、明治維新関係資料を収蔵展示している。

龍影閣

昭和四十三年十月三日移築竣工。木造二階建瓦葺、延三三四平方米。一階は十八畳二間のほかに、応接室、納戸、控室、食堂等があつて、二四三平方米。二階は十畳二間に茶室等で九一

平方米ある。

明治十一年十月二十六日明治天皇が北陸・東海両道御巡行の途次、愛知県に臨幸遊ばされた際に、県が便殿として造築した建物であつた。昭和七年、西区庄内公園に移され、野原新太郎氏が保存の任に当たっていたが、明治維新百年に際し同氏より維新関係資料約百点とともに献納せられたものである。

なお、二階の御座所は当時のままに保存されており、一階は錬成道場として使用されている。

千秋閣

昭和二十五年六月竣工。平成元年七月一日増改築竣工。面積七四、〇八平方米。構造は数寄屋造母屋入側、水屋付である。参拝者休憩所付属舎として茶席のほか、一般崇敬者の休憩、集会にも使用せられる。千秋と名づけたのは旧大



龍 影 閣



文 化 殿



蓬 庵



清 雪 庵

宮司千秋家の松の太木を使用したのによる。
又 兵衛

この茶室の建築年代は明らかでないが、白川郷の合掌造前期のものといわれる。もと岐阜県吉城郡細江村の坂上又兵衛の老家であったが、先祖又兵衛は近隣に聞えた豪農で善人、人呼んで「ほとけの又兵衛」といったという。昭和三十三年神野金之助氏より寄付を受け、原型のまま保存し茶室として使用している。

清 雪 庵

伊東信一氏（綿糸商）の邸内にあった茶席で氏の歿後、邸宅は市へ寄付され、戦後茶席のみ神宮境内へ移築された。

六 友 軒

徳川園内に国宝猿面茶屋を模して「豊庵」を建てた際、その寄付として六友会（当時の在名

美術商の代表的な者の集りという）が建てたもので、益田鈍翁が六友軒と命名した。昭和二十年戦災によって焼失したが、六友軒のみは残存。戦後熱田神宮献茶会設立（昭和二十二年）を機として、六友会より献納されたもので、茶席として使用せられている。

蓬 乾 亭

もと熱田神宮の茶所として、参拝者にお茶を振舞ったところである。高橋彦二郎氏の献納にかかる。彦二郎氏と乾豊彦氏の兄弟が改築、現在茶席として使用せられている。蓬乾とは彦二郎氏の俳名蓬庵の蓬と、乾氏の乾をとって名付けたという。

蓬 庵

昭和四十一年十月一日竣工。高橋彦二郎氏の献納された茶席で、数寄屋造十二坪、増築分二

坪、待合及び物置二坪で計十六坪である。

大 楠

境内には楠が多いが、そのうち特に巨大なものが七本あったので、俗に七本楠と言われる。殊に手水舎北の大楠は弘法大師手植えと伝え、樹齢千年を越す巨木である。

宝 蔵

昭和二年竣工。鉄筋コンクリート造で文化殿宝物収蔵庫ができるまで、ここに神宮の宝物類を収めていた。

神 輿 庫

昭和三十二年十二月竣工。鉄筋コンクリート造で宝蔵と相対し、神輿、執物、装束類を収める。

西 楽 所

もとは東西相対して、東楽所、西楽所又は左楽所、右楽所ともいい、海上門を入ると左



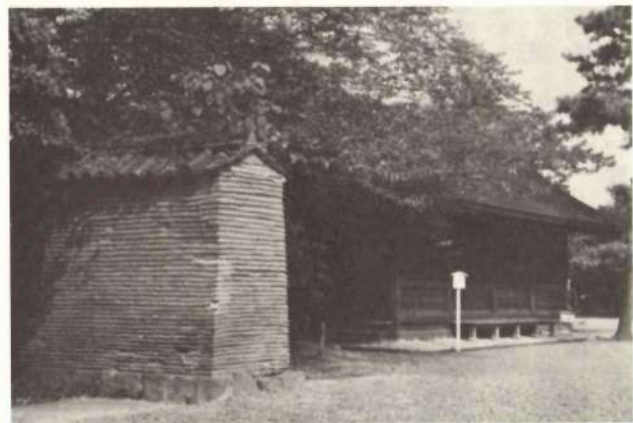
清 雪 門

右に向いあっていた。貞享三年（一六八六）五代將軍徳川綱吉の再建である。清雪門、南新宮社、氷上姉子神社本殿と共に、神宮では古い建物に属する。

清 雪 門

末社楠御前社の北東にあり、もと別宮の東門、本宮の北門とも伝える。両袖には築地塀が一部残っている。俗に不開門といわれ何百年來かたく閉ざされたままである。天智天皇七年（六六八）新羅の僧が神剣を盗み出しこの門を通ったといわれ、以来不吉の門として忌まれたとも、神剣還座の際門を閉ざして再び皇居へ遷ることのないようにしたとも伝える。

なお昭和三十八年六月、解体修理の際、屋根の桁受皿斗に貞享三年寅六月十七日、遠州浜松浅原庄右衛門とある「墨書」が発見された。浅



西 楽 所 と 信 長 塀

原は貞享修理の時の大工の名である。なお正門、東門、西門として海上門、春敵門、鎮皇門があり、さらに著名な門として清雪門があったが、現存するのは、この門のみである。

信長堀



佐久間燈籠

永禄三年（一五六〇）織田信長桶狭間出陣の際、熱田神宮に願文を奏して大勝したので、そのお礼として奉納した築地堀である。土と石灰を油で練り固め瓦を厚く積み重ねたもので、必要大多數の瓦は本宮北の地に竈を築き焼いたので、その土地の名を「瓦焼」というようになったと伝え、練堀の古式にならない、兵庫西宮神社の大練堀、京都三十三間堂の太閤堀とともに日本三大土堀の一つとしても名高い。

佐久間燈籠

東参道が正面参道と合する東

南の一角にある。家康の臣尾張御器所の城主佐久間盛次の四男、大膳亮勝之が海上で台風に遭い、当神宮の守護を祈り、難を免かれたので寛永七年（一六三〇）そのお礼として寄進したものである。宝永年中地震により転倒し、明治二十四年再び転倒したとき、海上門内より現在地に移した。なお佐久間燈籠は京都南禅寺、東京上野東照宮にもあり、江戸時代から三大燈籠の一つとして知られている。

二十五丁橋

尾張名所図会や名古屋甚句で名高い。板石が二十五枚並んでいるところから二十五丁橋といわれ、架橋は不詳であるが、名古屋では最古の石橋ともいう。もと旧参道（神宮をめぐる堀割）にかけられ、昭和十一年の境内拡張により解体されたままであったが、昭和三十年三月末日、



二十五丁橋



土 用 殿

現在地に復元され、昔ながらの優雅な姿を見えている。

土 用 殿

御剣を奉安した御殿で、旧本殿の東に相並んで鎮座せられていた。様式は宝庫造、俗に井楼組の造で、桁行一間四尺四分、梁間三尺五寸五分、屋根切妻桧皮葺で箱棟であった。永正十四年（一五一七）將軍足利義植の造営と伝え、天文十一年（一五四二）修造せられている。昭和二十年の戦災により焼失したが昭和四十六年古式のままだに杉の赤身の上材でもとの地に復元せられた。

三 戦災焼失の建造物

熱田神宮には国宝の神門をはじめ由緒ある建築物も多く存したが、昭和二十年の空襲でその大部分を焼失。今ここに焼失建造物の概要を記す。

海上門

海蔵門ともいい、いまの第三鳥居の東に旧参道に面して建てられていた丹塗の門で、朱鳥元年の建立と伝え、僧空海筆の大額が掲げられていたという。もと本宮の正門（南門）であった。元亀二年（一五七二）織田信長が改築。貞享三年（一六八六）徳川綱吉が修理を加えた。正門三間一戸、側面二間の円柱八脚門で中央一間には板扉を付し、屋根は切妻造、桧皮葺で二間繁樺を用いていた。外観質実剛健でよく整い、しかも細部の絵様曲線よろしく変化に富み、室町末期の優作としての価値を発揮し、特別保護建造物（国宝）であった。

春敲門

朱鳥元年の創建。貞享三年改築されている。屋根切妻造桧皮葺の二間繁樺を用いた円柱の四脚門で、外観よく素朴剛健の風を存していた。扁額は小野道風筆と伝え現存する。もと東門であった。



春 敲 門 額

鎮 皇 門

楼門、屋根入母屋造松皮葺、正面には軒唐破風を付し二間繁樺を施しており、腰の四方の廻縁には高欄をめぐらし、上層の正面中央の間に大華燈窓を開いていることが珍らしいとされている。豪華な風を見せ桃山時代の特色を発揮し、特別保護建造物（国宝）であった。もと西門であり春敲門と相對していた。五月五日の神輿渡御神事にはこの楼上に神輿を昇ぎ上げ、皇城の鎮護を祈り奉るところからこの名前があるという。

朱鳥元年の創建。もと天武天皇宸筆の扁額があったが、正応四年（一二九一）炎上。後伏見天皇から勅額を賜ったが、慶長初年の炎上に再び焼失したという。続撰清正記及び腰組梓肘木等の墨書銘によると、慶長五年（一六〇〇）加藤清正が改築。貞享三年綱吉が修理を加えている。

三間一戸、側面二間の円柱八脚

権 殿

赤坂仮皇居内の賢所で、明治二十二年明治天皇の思召により寄進せられた。当初八剣宮の御垣内にあって、御饌殿として朝夕御饌供進の祭事を行っていたが、昭和十二年現神楽殿あとに移り、本殿造営修理等の際の仮の御殿としていた。

長 殿

土用殿と権殿との東南に西面した建物で、赤坂仮皇居内の神嘉殿であり、権殿と同時に寄進せられた。いずれも構造簡素なうちに重厚味を特った建造物であった。長殿と称したのは、踏歌神事の頌文にある「七の道六十乃県の御調物」とおさむる此の御宮の東西の長殿の横桁の多和無まで左右に打積取め給ひて」とある長殿の称によっている。



鎮 皇 門

祭器庫

長殿の南にあり校倉造の建物であった。文庫として使用され貴重な文献が納められていた。

旧政所

もとの神宮の宮務をとったところで明治十一年十月、明治天皇御巡幸の際、当神宮に御参拝の折、休憩された建物であった。

宮庁

斎館

勅使館

東参道の北、神楽殿と鍵の手に棟を接し覺を並べた宏壮な建物であった。宮庁は神宮の宮務をとる所。斎館は、斎戒参籠のための建物。勅使館は例祭に勅使参向の際、または大祭に幣帛供進使参向の際の斎館に充てられたもので貴賓室の設備も整えられ、昭和十四年着工、十七年六月竣工した。神楽殿とは廊下をもって連結され、内部の諸施設様式など神社建築の粹をつくり規模の雄大さは比類のないものであった。

第四章 造 営

一 戦前の造営

熱田神宮は明治二十六年（一八九三）神器奉斎の故をもって、従来の尾張造の様式をあらため伊勢の神宮とほぼ同様の神明造に改造せられた。

創祀以後、朱鳥元年（六八六）六月、天武天皇の勅命によって、神剣を尾張熱田社に再び送り給うたことが日本書紀に記され、熱田大神鎮座記はこのことを記したのちに、このとき改めて大宮や別宮諸神社を造営して、十二月に新宮に遷宮の儀を行ったと記している。田島氏文書の貞享三年（一六八六）の熱田神宮御遷宮諸事留に朱鳥元年に遷宮が行われたことを記すのは、鎮座記の線にそったものであらう。

元明天皇の和銅元年（七〇八）九月には、八剣宮を始めて建てた記録が張州府志に見え、新造の宝剣を収めたところ。

元正天皇より後鳥羽天皇に至る四百数十年間の造修については、承和十四年（八四七）の尾張国符や、嘉祥三年（八五〇）の太政官符によると、さきごろ大神のお告げによって神宮寺を建てたが、中でも如法院一所、別院三所、塔三基、仏菩薩四王像合計一、〇二八軀を造り、経論一五、九〇〇余巻を書写したとあり、この頃の造営事業が極めて大規模であったことがわかる。

神宮寺関係の建物すらこのようであったから、この当時本宮関係の建物がいかに整備されたかは想像に難くない。鎌倉時代に入って、建保四年（一二一六）八月に熱田社の御戸が開かなかったことと、焼失のことによってトが行われたと百鍊抄に見えている。

正応四年（一二九一）二月熱田社の焼けたことが帝王編年記等に見え、間もなく造営が行われたようである。

室町時代では、応永二十六年（一四一九）將軍義持が本宮を造営して遷宮を行っているが（田島文書）これは火災後の復興であらう。さらに長祿二年（一四五八）義政、永正十四年（一五一七）義植の造営がある。このうち、永正の造営には、後柏原天皇の綸旨が下され、遷宮が執り行われている（宣胤卿記）。

織田信長は元龜二年（一五七一）熱田社を修造しているが、本宮の正門に当たる海上門は、このとき楼門形式をやめて八脚門として新造せられたという。

桃山時代では、天正十九年（一五九二）に豊臣秀吉が、慶長五年（一六〇〇）徳川家康が熱田社の修理を行った。慶長の修理のときには加藤清正が大檀那となって鎮皇門を造営している（鎮皇門肘木墨書、続撰清正記）。

江戸時代に入って、明暦元年（一六五五）・寛文二年（一六六二）の両度、尾張家の徳川光友が修理を加えている。

ところが貞享元年（一六八四）松尾芭蕉が熱田に参拝した時のことを、野ざらし紀行に「社頭に破れ築地はたふれて草むらにかくる。かしこに繩をはりて小社の跡をしるし、ここに石をすゑて其神となれる。よもぎしのぶ心のままに生ひたるぞ中々にめでたきよりも心とまりける」と記して「しのぶさへかれて餅かふやどり哉」と吟じている。当時の荒廃の状態がしのばれるのであって、この状態を黙視するに忍びず、あらゆる努力と犠牲とをもって之が造修方を纒々幕府へ請願に及び、ようやく貞享三年（一六八六）綱吉の代に至りその目的が達せられた。この造修は幕府より派遣された修覆奉行石丸定勝・西山昌春の指揮による幕府直轄で行われ、近世特筆に価する程大規模のものであった。この年四月八日に鉦始（かねはじめ）を行い、本宮の社殿及び拝殿、勅使殿、左右楽所、神楽殿、宝庫、神廐、政所、神門等を造営したほか、別宮八剣宮をはじめ、高座結御子神社、日割御子神社、大福田祠、上知我麻神社、氷上姉子神社、南新宮社、一之御前神社、竜神社、御田神社、楠御前社、左王社、右王社、清水社、内天神社等の摂社末社の社殿、拝殿、鳥居等を或は新造或は重葺し七月九日に工事を終り、本宮及八剣宮の遷宮を行ったのは七月二十一日であり、多くの工人を使つての急速な工事であつたことがわかる。翌二十日には氷上姉子神社、高座結御子神社、大福田祠、日割御子神社、上知我麻神社の遷宮をなし、自余の諸社も順次遷宮を行ったとある。綱吉の造替によって熱田神宮は積年の荒廃を一挙に回復したのである。



尾張名所図会

貞享四年（一六八七）ふたたび芭蕉熱田に詣でたところ、敷きつめられた玉砂利も清く、社も立派に修覆せられ、見るからに神々しさを添え、当日あたかも雪さえ降り、一層神苑は美しく尊く拝したとのことを、笈の小文（おみづのこぶん）においてのべ「磨き直す鏡も清し雪の花」と吟じている。

その後は尾張藩主などが臨時修造を加え、宝永二年（一七〇五）十二月二十六日、享保七年（一七二二）七月二十一日、元文元年（一七三六）十二月十五日、延享四年（一七四七）十二月三日、安永元年（一七七二）十二月五日、寛政七年（一七九五）十二月五日、文政元年（一八一八）九月二十三日、天保十三年（一八四二）九月二十二日にそれぞれ正遷宮を行い、また慶応二年（一八六六）孝明天皇は熱田神宮を「格別の御社柄」と仰せられ、弁官一人を行事とし

て差遣あり、同年社殿を造替し正遷宮をあげている。これらの造替は略二十五年毎に行われており、藩主徳川家これを掌り、木曾山の木材を用い、修造免田三百八十五町余歩の収納をもってあてられている。

さらに明治二十六年（一八九三）には、前述のように社殿を伊勢の神宮と略同様の神明造に改造あり、これより前、明治二十二年には明治天皇の思召をもって、元赤坂飯皇居の賢所及び神嘉殿を御寄進あらせられた。大正八年（一九一九）の境域拡張整備の工費中には畏くも御内帑の資を賜わっている。

近く昭和六年には、本宮を始め、別宮摂末社に至るまで修築せられ、同七年十一月一日に本宮仮殿遷座祭を、同十年十一月一日に本殿遷座の盛儀を斎行せられ、当日同刻天皇は宮中において遙拝せられ、この両度の祭儀には、勅使ならびに儀仗兵を御差遣になり、ことに本殿遷座祭当日は、全国諸官吏学校に対し休暇を賜う旨仰せ出され、翌日の臨時奉幣祭には、東遊の奉納があった。

かくて、この遷座を終え建造物や諸施設もとのい、名実共に大熱田の偉容を誇ったのであるが、大東亜戦争によって、大都市名古屋の中心にある熱田神宮は、必死の防火作業にもかかわらず御本殿を除く諸建造物の大半を焼失するに至った。そこで戦後、民生の安定をまわって、全国崇敬者の造営に対する熱意の結集を図り、鋭意基金の募集を進める一方、工事また着々と進み、昭和三十年十一月十一日には本殿遷座祭、翌十二日には臨時奉幣祭を斎行せられ、ひき

つづいて新時代に即応した文化的諸施設をも含めて、日本人のこころのよりどころたるにふさわしい綜合施設の完備へと造営がすすめられた。

二 戦後の造営

明治、大正、昭和にわたる神社神道はなやかな頃に、大規模に計画造営された熱田神宮は、全国一の規模をもつ立派な社であったが、昭和二十年三月、五月二回の戦災を受けて殆どその建造物を烏有に帰し、境内も荒廃した。

そこで、神宮では直ちに本殿以下八廡復興工事の計画を進め、着工の手筈を整えたが、終戦と同時に社会は混乱状態にあり、さらに神道指令等に依り工事は進行不能となった。

戦後いち早く熱田神宮復興の要望が各方面から叫ばれたが、神宮当局としては当時の疲れ切った世情を考え、市民の生活に安定の目途がつくまで御造営の着手を手びかえるのが神慮にそい奉る所以であらうとし、言語に絶する不便に耐えながら三年を経た。

昭和二十四年。一日も早く御復興をしなければという気運は熟しに熟し、若葉萌ゆる五月熱田神宮造営会発会式を挙行。造営計画、設計、予算、募金方法も慎重に審議され、昭和年代第二回の造営にその第一歩を踏み出した。工事に当っては、伝統の美しさを充分に尊重しながら、

良きは採り悪しきは捨てて、新時代にふさわしい方法で進められた。

復興御造営第一工事として着手した「参拝者休憩所」は、工事半ばにして造営会発会式に使用され、同年七月竣工、続いて「付属舎」（千秋閣）の着工の運びとなり、十月末完成、広間は茶席として使用されている。

これに併せ西門鎮皇門跡に、西参道入口の目標となる、木造大鳥居を建て、続いて第三鳥居も新規建替を暮の十二月に完了し、新春の初詣には木の香も新しい大鳥居を仰ぐことができた。

この間、摂社「上知我麻神社」も、名古屋市都市計画の要請により南参道樹型西側の位置に社殿、社務所の移築を終った。また名古屋市幹線道路計画により「旧宮庁」（元錬成道場）並びに「白鳥職舎」、「大津町線石垣」等の移転も余儀なくされ、境内元勅使館跡に昭和二十六年八月「仮宮庁」新築にとりかかり新春早々完成を見た。

ついで二十六年末より整地を続けてきた仮宮庁西高台に、旧宮庁を解体移転する工事軌道にのり昭和二十七年九月に完成。「参集所」として広く崇敬者関係団体等の集会等の用に供し、結婚式控室にも使用することとなった。

昭和二十八年四月には「儀式殿」が竣工。同時に「本宮大前整備工事」も着手せられ、正面石階の幅を広くし、正面板垣鳥居及板垣を取のぞき、神明風の「拝殿」（外玉垣御門並四尋殿）「東西翼廊」「祭具所」を含む一連の工事に着手し昭和二十八年十二月には新拝殿を完成した。



遷御の儀（昭和30年）

先に着工の「勅使館」は、元春敲門跡付近高台に、儀式殿と連結して入母屋造、木造瓦葺の純日本風の建物として、昭和二十九年五月完成。

昭和二十九年五月、正式に皇大神宮（内宮）古正殿譲渡の決定を見た。本殿は唯一神明造国宝級の内宮古正殿をそのまま譲渡を受けたわけである。屋根は市街地であるため銅板葺とし、堀立柱を杵石据えとし改築された。

愈々御遷宮を目指して、「御本殿」の竣工及殿内の舗設、「幄舎」、「神饌所」改築、「南宿衛舎」の建築が進められ、一方「神符授与所」「能楽殿」工事も併せて進められた。昭和三十年十一月第一期工事が完了。

本殿遷座祭が行われた後ひきつづき第二期工事に入り、「又兵衛」の移転改築、「神輿庫」が新築された。三十三年六月には「新神楽殿」地鎮祭が行われ、三十四年三月「松姫社」の遷座祭が行われた。同九月神楽殿は竣工した。

境外末社「鈴之御前社」も三十五年、例祭を前に竣工、遷座祭が行われた。

昭和三十五年十一月から中重より以北の「本宮板垣」及「北御門」の改築が行われ三十六年三月末完成。三十六年三月より境外摂社「高座結御子神社」の造営に着手し、三十八年五月遷座祭が行われた。

この間「西楽所」の桧皮の葺替、「清雪門」をはじめ境内外摂末社の重修、改築等着々進められつつあり、新時代にふさわしい規模をもった文化殿、また「別宮」「上知我麻神社」「青衾神社」「日割御子神社」「休憩所」「龍影閣」の復興も完了し、昭和四十一年に文化殿。四十二年に斎館が竣工。さらに四十七年三月「神宮会館」。同年十二月に「宮庁」。五十三年四月神宮広場修景工事、緑化駐車場。五十四年五月勅使館改築。同年七月南神池周辺修景工事。同年八月神宮会館新館増築。五十六年三月南門広場整備工事がそれぞれ竣工して熱田の名に相応しい容姿をととのえるに至った。



臨時奉幣祭（昭和30年）

第五章 祭典・神事

一 恒例祭典及び神事一覧

熱田神宮では、年間に約六十度の恒例の祭典が行われるほか、約十度の特殊神事がある。その中で最も重要な大祭は、熱田祭の名をもって呼ばれる例祭であつて、また数多い諸祭典の大半が、農業を主とした産業民生と深い関係のあることは、熱田神宮の歴史的な特性が知られると共に、わが国の神社本来の姿を示唆している。

月	一	月	月
			日
			大祭
		一日 歳旦祭	日
		三日 元始祭	中祭
		毎日 日供祭	日
一日 月次祭			小祭
		七日 世様神事	日
		十日 踏歌神事	特殊神事
		十三日 封水世様神事	
		十五日 歩射神事	
		毎日 一 高座結御子神社月次祭	日
		五日 大國主社・事代主社祭	撰末社祭その他
		毎月五日 上知我麻神社月次祭	
		毎月十三日 浮島社月次祭	
		毎月二十三日 鈴之御前社月次祭	
		初午の日 稲荷社祭	
		節分の日 節分祭	

五	月	四	月	三	月	二
九日				七日		
熱田講社 春季大祭				祈年祭		
					十日	
					紀元祭	
一日 月次祭	一日 月次祭			一日 月次祭		
四日 舞楽神事	一日 舞楽神事					
五日 神輿渡御神事	四日 醉笑人神事					
六日 水上姉子神社頭人祭	三日 幼児生育祈願祭	旧初午 春分の日 春季皇霊祭遙拝 高座稲荷講社春季大祭	旧初午 春分の日 春季皇霊祭遙拝 高座稲荷講社春季大祭	三日月終 水上姉子神社太々神楽	三日月終 水上姉子神社太々神楽	三日月終 水上姉子神社太々神楽
八日 御陵墓祭						

十二月	十一月	十月
	一日 熱田講社 秋季大祭 三日 奉賛会大祭	七日 新嘗祭
三日 天長祭	三日 明治祭	
三日 除夜祭	一日 月次祭 三日 勤労感謝祭	
五日 御煤納神事		
三十一日 大祓	十五日 名氏子祭 三日 献詠祭 八日 高座稲荷講社秋季大祭	第一日 水上姉子神社例祭 日曜日 御田神社新嘗祭 十七日 水上姉子神社新嘗祭 十八日 熱田恵比須講社大祭 二十日 浮島社例祭

	九月	八月	七月	六月	五月
				五日 例祭	
一日 月次祭	一日 月次祭	一日 月次祭	一日 月次祭	一日 月次祭	
		八日 神輿渡御神事		大日 御田神社祭 五日 南新宮神社祭	五日 御衣祭 八日 豊年祭
仲秋名月の日 青衾神社祭	秋分の日 秋季皇霊祭遙拝 二十八日 大高斎田拔穂祭		十一日 松姫社祭 土用入の日 御井社祭 三十一日 鈴之御前社祭	第四日 大高斎田御田植祭 五日 献茶祭 二十八日 琴瀬山神社祭 三十日 大祓	三十一日 高座結御子神社例祭宵宮祭

二 おもな祭典及び特殊神事

歳旦祭

一月一日

歳旦祭は暁闇まだ深く、中重でたかれる庭燎の焰色がかすかに玉垣をてらし出す午前五時、純白の斎服に身をかためた宮司以下祭員が本宮に参進して行われる。

玉垣の奥深くで伶人の奏する雅楽の音はゆかしくひびき、宮司は神前に進んで「この年がよき年であるように」と祈念する御賀の寿詞を奏上する。

正月五日間で参拝者三百万をこえる熱田神宮の初詣は、全国的にも有名で、広い境内をうめつくす壮観さは比類ないといわれる。

なお歳旦午前零時を期してはじめられる「初神楽」は、神楽殿で奉奏される。

大国主社・事代主社祭（初えびす）

一月五日

「五日えびす」ともいい、摂社上知我麻神社の境内にある大国主社、事代主社の祭儀である。この祭典を初えびすといい、午前零時から行われる。新春吉兆の福運を授かろうとする参拝者で賑わい、これに対して古来神宮から特殊な恵比須大黒の絵像を授与する。殊に一番札の信仰があり、多数の報賽者が争ってこれを受けようとひしめきあうさまは盛観である。

なおこの恵比須大黒像の原本は「熱田三面大黒」という古図によったもので、像を描いた最初のもので伝えられる。「掛鯛」といって、鯛二匹を藁でしばったものをお供えしたり、お札をいただいて帰る途中で寄り道すると福が逃げる、というので知人に会っても口をきかずに一目散に帰宅して祭る奇習などがある。

世様神事

一月七日

年の始にあたり、その年の豊凶を占う神秘的な神事であって、前年の「封水世様神事」（一月十二日）に、清水を入れて東宝殿（江戸時代以前は本殿）の床下に納めた斎甕を末社大幸田神社の前にすえ、禰宜検知のもとに、雁使が斎甕の封を解き、尺木（神事用の特殊なもので、木製長さ一尺、両端に紙垂を付ける）をとって水量をはかり、その年の雨量の多少、旱魃の有無



初 え び す



世 様 神 事

を占う。

神事の次第は、当日午後二時、禰宜、雁使、白丁（二人）斎館より参進して東宝殿の前に列立する。次いで白丁斎簀を奉昇、再び列次を整えて末社大幸田神社の前に至り、斎簀を神前にすえ、禰宜以下所定の座に著く。次いで禰宜斎簀を点検し、側に蹲居する。次いで雁使斎簀の蓋をのぞき、尺木をとって水量を計り、微声で「減水何分」と称し、減水量を禰宜に報ずる。次いで禰宜は本座に復し、雁使は斎簀の蓋を覆い、終って本座に復する。

次いで前儀に準じて東宝殿の前に至り、斎簀を同殿床下に納め、禰宜以下退出、斎館に入るのである。

（註）往昔、この神事は夜間に行ったと伝えられている。

踏歌神事

一月十一日

踏歌神事は一名「アラレバシリの神事」、俗に「オベロベロ祭」とも称する。

平安朝時代の宮中行事の一つであった踏歌節会の行事が、何時の頃よりか熱田神宮の神事にとり入れられたのである。踏歌神事とは年の始にあたり、春ささす大地を踏んで土地の精霊を鎮め、除厄と招福とを神に祈る意義をもっている。

神事を行う場所は、末社影向間社（古くは旧政所）本宮、別宮、末社大幸田神社で、神事の次第は、当日午前十時、詩頭以下斎館より参進、祓所において祓を受け、次いで陪従、笛役、高巾子役は大幸田神社の前に進み、笏拍子（しやくはし）を打ちつつ、「竹川半首」を歌い、次いで鎮皇門跡に至って、再び「竹川半首」を歌って影向間社に至る。



踏 歌 神 事



踏歌神事

る。

この間に、詩頭、舞人は影向間社に至り、陪従以下の参著を待つ。全員所定の座に著くと、先ず雁使が詩頭、舞人には桜。陪従、笛役、高巾子役には山吹の挿頭花を各々の冠にさし、陪従「竹川半首」を歌い、舞人は「卯杖舞」を舞う。終つて詩頭以下退出、列次を整えて西参道を経て大前に参進、第三鳥居内において東向きに列立、陪従「竹川半首」を歌う。

この時、宮司、権宮司は齋館より参進、拝殿前において祓を受けて所定の座に著く、詩頭以下は大前石階下所定の座に著く。これより本宮大前の儀が始まる。

本宮大前の儀は、先ず宮司が祝詞を奏上する。次いで陪従は「万春楽」を歌い、舞人は一人づつ順次大前石階下に進んで一揖すること三

度。次いで陪従は「竹川半首」を歌い、舞人は「卯杖舞」を舞う。次いで陪従は「浅花田」を歌い、舞人は「扇舞」を舞う。

次いで詩頭、高巾子役大前に進み、詩頭は詔文を読む。高巾子役は巨大な冠をかぶり振鼓を持ち、詔文の「カナワサ右」「カナワサ左」の合図により、右、左と振鼓を高く掲げて数度これを打ち振る。次いで陪従は「何そもそも」を歌い、舞人は前儀のように、大前石階下に進み、一揖すること三度。次いで宮司以下退出、齋館に入るのである。

別宮、末社大幸田神社の儀は、午後一時より、権宮司が斎主となり、詩頭以下奉仕して本宮の儀に準じて執行する。

なお、高巾子役の打ち振る振鼓の音色によって、その年の豊凶が占われるのである。

宮司、権宮司以下の奉仕員は、詩頭一人、陪従五人、笛役一人、高巾子役一人、舞人四人、雁使一人、それに宮司、権宮司には権禰宜一人が副従する。

宮司、権宮司、副従権禰宜は狩衣。詩頭、陪従、笛役、高巾子役は斎服を着け、舞人は小忌衣を着け、巻纓冠をかぶり、太刀を佩き、雁使は浄衣を着けるのである。

封水世様神事

一月十二日

封水世様神事は、前述の齋甕を神楽殿（古くは旧政所）に据え、禰宜検知の下に、雁使が齋

甕に新たな清水を汲み入れ、尺木を執って水量を計り、終って厳封の上、之を東宝殿の床下に納めるのである。

神事の次第は、当日正午、禰宜、雁使、白丁が斎館より参進して東宝殿の前に列立する。

次いで白丁斎甕を奉昇、再び列次を整えて神楽殿に至り、斎甕を神前に据え、禰宜以下所定の座に著く。次いで雁使祈念の後、斎甕の蓋を除き、斎甕の目方を計り、古水を棄却する。

次いで雁使斎甕の目方を計り、清水を汲み入れ、尺木をとって水量を計る。次いで禰宜尺木をとって水量を点検する。次いで雁使斎甕の目方を計り、蓋を覆い、こよりで結び、尺木を添え、両端に紙垂を付ける。終って雁使本座に復する。

次いで前儀に準じて東宝殿の前に至り、斎甕



封水世様神事



魔津星行事(歩射神事)

を同殿床下に納める。

(註) 雁使は目方をはかる度毎に之を記録する。往昔、この神事は午前十時に行っていたという。

歩射神事

一月十五日

歩射神事は一名歩射会、俗には御的とも称する。

起源は詳かではないが、古来朝廷で行われた新春の歩射の行事になった、一種の豊年と除災とを神に祈る神事で、もとは当神宮摂社高座結御子神社で行われたのを、元禄の頃から本宮に移したものと伝え、尾張国内の各神社で行われる同一神事の源流をなすものである。

神事を行う場所は、旧海上門内の広場であるが、之に先立ち、当日早朝祭典が執り行われる。

神事の次第は、当日午前十時、宮司以下祭員

斎館より参進、祓所に於いて祓を受け、次いで神楽殿所定の座につき、小祭式により祭典を行う。これには歩射の儀に奉仕する魔津星役、射手（六名）が参列し、祭典終了後、次いで魔津星役が射手に「秘文」を伝授する。次いで射手が大的に千木をつけ、祓所役が大的を祓清める。歩射の儀に先立って予め所定の位置に建てる。

（註）大的の寸法、径六尺。中央の千木、横一寸八分、縦六寸。上下左右の千木、横一寸二分、縦三寸六分。

午後一時、宮司、権宮司、矢帳役、魔津星役、射手、雁使、小禰宜斎館より参進所定の座につく。次いで雁使大的の前に進み、之を点検し、終って幄舎に復する。

「酒講の儀」

小禰宜（白木弓、白羽矢、幣、祓具を載せた小案を捧持する）中立射手（二人）初立射手（二人）魔津星役、雁使の列次で大的の前に至る。

次いで小禰宜小案を大的の前に置き、魔津星役以下所定の座につく。次いで小禰宜「クイツミの膳」を配り、次いで魔津星役以下に神酒を進める。

「魔津星行事」

魔津星役、大的の前に進み、先ず、幣を大的の天、左右に挿し、祓具（切麻散米）で大的を



奉射行事

祓う。次いで白木弓（檜の木で作る。長さ鯨尺三尺三寸、弦は麻苧を捻って作り、白紙を巻く）白羽矢（女竹で作る。長さ鯨尺一尺二寸、羽根は奉書にて作る）をつがえ、先ず天の矢を放ち、次いで地の矢を放ち、次いで中央の千木に放つ。終って魔津星役以下幄舎に復する。

「奉射神事」

初立射手二人（介添役二人添う。以下之に倣う）進んで射場所定の位置に至り、矢一手（二本）宛を交互に射放ち復席する。

次いで中立射手二人、次いで後立射手二人の順にて同様のことを繰返す事三回、即ち射手一人にて六本、計三十六本を奉射する。

この射礼は当神宮独特のもので、社伝の古式によっている。

奉射が終ると、射手はそれぞれ、宮司の前に

進み、三色の幣を受け、又、矢帳役は矢帳を宮司の閲覧に供し、神事を終り、宮司以下退出齋館に入るのである。

この歩射の儀の終るのを待って、拝観者が一齐に大的を目ざして押しかけ、之を奪い合うが、特に大的中央の千木は、古来魔除けの信仰があり、的の細片までも得ようと群集の争うさまは壯観である。

なお奉仕員の服装は、宮司、権宮司、矢帳役、魔津星役、介添役は狩衣。射手は麻浄衣、雁使は大紋、小禰宜は黄色の麻布衣、矢取役は素襖をつける。

舞楽神事

五月一日

舞楽神事の起源は詳かでないが、平安期の初期にはすでに行われていたと伝える。即ち百十三歳の高齡で、よく和風長寿楽を舞って、仁明天皇の天覧の榮に浴した、かの有名な尾張浜主は、赤白桃李花や、青白蓮華樂の舞の作家である尾張秋吉などと共に、熱田神宮の社家であり、現存する重要文化財の舞楽面十二面に治承二年（一一七八）、弘安二年（一二七九）の頃に修覆した裏書のある点などからして、その歴史の古いことがわれ、恐らく宮廷以外では日本でも古い舞楽であるということができよう。

それ以降現在まで多少の移り変りはあったが、よく保存継承せられてきた。

神事の当日は、楽所の前庭に「だ太鼓」及び「舞台」を鋪設する。本宮内玉垣御門前の案上



舞 楽 神 事

に舞楽目録を奉奠、祝詞座並びに宮司以下の本座を設ける。

神事の次第は、午前十時三十分、宮司、副権禰宜一員、斎館より参進、祓所において祓を受け、本宮中重所定の座に著く。次いで宮司進みて祝詞座に著き、祝詞を奏上する。終って各退出、舞台の北方に止立する。副権禰宜は、神前の舞楽目録を捧持して宮司に従う。

これより先、半臂装束の楽人二員（左方、右方各一員）舞台の両側北寄りに進み、宮司の参著を待つ。次いで宮司、目録をそれぞれ楽人に授け、宮司は所定の幌舎に入り、楽人は楽所に復する。

これより振鈴に始まり、長慶子に終る八番の舞楽が順次奉奏される。この番組については、古来次に示す十組があつて、十年目毎に反覆し

て行っているのです、現今においても、神宮職員ならびに桐竹会々員（雅楽奉仕団体）等の奉仕のもとに多少の異同はあるが、古儀にならって斎行せられている。

宮司及び副從權禰宜は狩衣、舞楽奉仕員は襲装束、蜜絵装束、裃襦装束等のいわゆる舞楽装束を着用する。

なお、戦災により東楽所、だ太鼓一基、舞台等を焼失したが、舞台は昭和五十三年に復元した。



舞 楽 神 事

舞 楽 番 組

十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
振	振	振	振	振	振	振	振	振	振	
鉦	鉦	鉦	鉦	鉦	鉦	鉦	鉦	鉦	鉦	舞 楽 番 組
地賀	延萬	綾承	仁裏	登桃	地賀	延萬	仁承	登甘	綾桃	組
	喜歳	和	和	頭	天	喜歳	和	和	天	李
久殿	楽	切	楽	楽	楽	久殿	楽	楽	楽	州
										切
林甘	貊打	古春	新央	林胡	長五	蘇	安	志喜	白春	陪太
	球	鳥庭	鞋宮	飲	保常	利	之	岐春	庭	平
歌州	鉦	蘇	花	鞆	歌	酒	楽	古	摩	手
										楽
拔還	納陵	還拔	貴散	落陵	拔還	納陵	還拔	貴散	落陵	
城	曾	城			城	曾	城			
頭	利	王	楽	頭	德	手	蹲	王	頭	楽
長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	
慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	慶	
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	

醉笑人神事

五月四日

醉笑人神事は、「会影堂神事」とも書き、又俗に「オホホ祭」「於賀斯祭」とも称する。これは天智天皇七年（六六八）に故あって、神剣が皇居に留まらせ給うたが、天武天皇朱鳥元年（六八六）、天皇の勅命によって還座遊ばされた時、社中挙って歡喜笑樂したさまを今に伝える珍らしい神事である。

神事の次第は、午後七時、禰宜以下祭員、齋館より参進、祓所において祓を受け、末社影向間社に至り、左右に列立する。次いで笛役一員、神前に進みて面宮の封を解く。次いで上臈より一員宛神前に進み出て、笛役の授ける神面を装束の袖の中に受けて隠し持ち、各復座する。

次いで下臈二員、神前に進んで蹲踞、この時左右側の祭員、相寄って半円形にこれを囲む、



醉笑人神事

次いで下臈二員、中啓にて神面を袖の上より軽くたくこと三度、一度毎に微声で「オホ」と唱える。次いで二員相對して蹲踞し同様の所作を行う。次いで笛役「タロリー」と笛を吹く。全員大声を挙げて笑うこと三度、終って各復座する。

次いで、神樂殿前、別宮八剣宮大前、清雪門前で同様の行事を行い、清雪門前で神面を笛役にかえて神事を終るのである。

この神事は浄闇の裡に斎行するのであり、特に神面は見てはならない神秘的なものとされている。

なお、この神事では祝詞、神饌が用意されない。

醉笑人といい、おほほという言葉からも推察されるが、酔って笑って、歩き回るよろこびの姿が、そのまま祭典といってよいものである。奇祭として名高い。

神輿渡御神事

五月五日

神輿渡御神事は、前述の神剣還座の縁故による神事で、還座の際「都を離れ熱田に幸すれど、永く皇居を鎮め守らん」との神託のまにまに、鎮皇門（熱田神宮西門、旧国宝、現焼失）に神幸せられ、門の楼上に神輿を昇上げ、はるかに皇居をみそなわし、皇城镇護の祭を斎行するので、古くは「神約祭」とも称した。

当日は、午前八時、本宮において奉告祭を行い、つづいて午前十時、出御の儀があり、次い



神輿渡御神事

で行列を整えて鎮皇門跡に神幸、祭儀を行い、再び行列を整えて本宮に還幸、神事を終る。

神事の次第は、午前八時、権宮司以下祭員齋館より参進、祓所において祓を受け、本宮瑞垣御門内所定の座につき、奉告祭を執行し、ひきつづき権宮司、御霊代を遷し奉り、終って各退出。奉告祭を終る。

次いで午前十時、宮司以下祭員、神幸所役、齋館より参進、祓所において祓を受け、拜殿所定の座に著く。次いで宮司一拝の後、宮司、神輿の前に進んで祝詞を奏上する。次いで禰宜、召立文を読み、神幸所役、召立につれて、それぞれ執物を捧持し前陣、後陣の列次を整える。次いで発輿、行列は表参道を出て、国道十九号線ぞいに進んで鎮皇門跡西門に着御。御輿を中央にすえ奉り、諸員所定の座につく。

次いで宮司一拝、献饌、祝詞奏上、神楽、拝礼等あり、次いで発輿、ふたたび行列を整え、元の道筋を経て本宮に還幸、禰宜の召立文につれて、執物を元の位置に復し、諸員所定の座につく。次いで祭儀を行い、終って退出する。

神輿渡御の列次

先駆衛士 (一員)	前導神職 (一員)	大 鉾 (一員)	控 (一員)	真 榊 (一員)
先駆衛士 (二員)			控 (二員)	
控 (一員)	警 護 (一員)	警 護 (五員)	御 楯 (一員)	御 鉾 (一員)
		警 護 (五員)	御 楯 (二員)	御 鉾 (二員)
御 靱 (二員)	御 弓 (一員)	御 太刀 (二員)	伶 人 (一員)	
伶 人 (五員)	伶 人 (二員)	伶 人 (二員)	巫 子 (二員)	
伶 人 (四員)	白 荷太鼓 (二員)	白 荷鉦鼓 (二員)	巫 子 (二員)	前行所役 (一員)

紫御翳（一員） 側衛衛士（一員） 御綱（二員） 輿丁（十二員） 宮司 権宮司 禰宜 随従（二員）
 紫御翳（一員） 神輿（二員） 御綱（二員） 輿丁（十二員） 随従（二員）
 側衛衛士（二員）

御鎌（二員） 御墨壺（一員） 御糸巻（二員） 御燈袋（二員） 御笙（二員）
 御楯（二員） 御手斧（一員） 御杵（二員） 御巻物（二員） 御琵琶（二員）

警護（二員） 警護（五員） 供奉員（二員） 後衛神職（二員） 後衛衛士（二員）
 警護（五員） 供奉員（二員） 後衛衛士（二員）

宮司以下祭員は斎服、神幸所役はそれぞれの役に応じ、狩衣、浄衣、褌、みつるぎ舞装束、東游の装束等をつける。

なお、戦災により、神輿、神幸具、神幸装束ならびに鎮皇門を焼失したので、神幸の儀は一時的に絶えていたが、昭和三十三年よりこれを再興した。

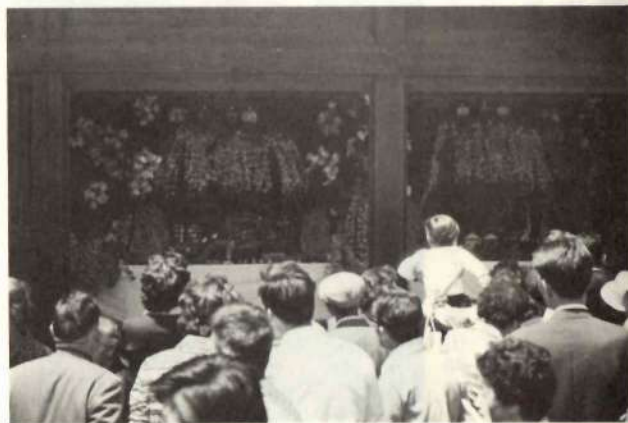
豊年祭 五月八日

豊年祭は、一月七日の世様神事と共に、農事に関係のある重要な祭で、俗に「御穀祭」、「花

の撓」「花の頭人」「おためし」とも称する。これは熱田神宮相殿の神にます日本武尊が、東夷御平定の際に、御道すがらあまねく人民に農耕、養蚕、培綿の術をさすけられた御徳を、今に追仰する祭である。

祭典の次第は、午前八時、宮司以下祭員齋館より参進、祓所で祓を受け、本宮瑞垣御門内所定の座につき、小祭式により祭儀を行う。祝詞奏上後、開扉所役が楽所の扉を開く外は通常の祭典と変らない。

この際に附随する行事として、楽所には数日前から参籠の神職によって作られた、陸田模造の畠所と、水田模造の田所との模型、俗に「おためし所」を飾り、八日より十三日までこれを一般に展観する。農民はこの飾物のでき具合によって、その年の豊凶を占うのである。



豊年祭（おためし）

御衣祭 五月十三日

御衣祭の起源は詳かでないが、熱田神宮の北方にある旗屋の地名については、雄略天皇の時（約千五百年前）呉から朝廷へ奉られた漢織が後世この地に住みついたので、機綾といったのを、さらに後の世に至ってこれを旗屋と改めたと伝え、また、旗屋の地は、相殿神にます宮實媛命が忌機殿にこもらせ給いて神御衣を織られた遺蹟であるから、機綾というなど諸説がある。いずれにしても熱田神宮の御衣祭は古くから行われていたことが窺われる。この祭も中世一時絶えていたが、明治十二年に再興せられ、のち年を逐うて盛んとなり昭和三十年には、「熱田神宮神御衣奉献会」を結成し、毎年の御衣祭には本会から御衣奉献正使、副使が奉仕し、半田市の「絹糸奉献会」から奉献せられる絹糸と共に御衣御料を奉ることとなり、今日に及んでいる。



御衣祭

祭典の次第については、当日早旦御衣御料は、機殿のある港区築地神社奉賛会の人々により捧持せられ、築地から海上をさかのぼって熱田区大瀬古町の神戸の浜に向う。この頃御衣奉献正使、副使は斎館より参進、神戸の浜にいたり、御衣御料を迎えたが、昭和四十五年より、事情により神宮東門にて迎え「大御用」の幟を先頭に、左の列次で参入、第三鳥居を経て本宮中重所定の座につく。

行列列次

前導	幟	大紳	大麻	伶人	御料札	和妙御料	御料札	荒妙御料
正使	副使	織女	熱田神宮総代役員	築地神社奉賛会	神御衣奉献会会員	半田絹糸奉献会その他一般参列者	稚児	

午前十一時、宮司以下祭員、斎館より参進祓所において祓を受け、本宮中重所定の座につく。これより大前の儀式が始まる。宮司祝詞奏上の次に、副使、和妙、荒妙を辛櫃よりとり出して飯案上におき禰宜、和妙、荒妙を折櫃に納む。次いで権宮司、これを点検したのち、禰宜が御衣御料を神前の案上に献ずる。次いで御衣奉献使の祭詞奏上、宮司以下祭員、御衣奉献使以下、参列員代表等の拝礼あり、次いで御衣御料、神饌を撤して祭典を終るのである。

例 祭

六月五日

例祭は畏きあたりより勅使を御差遣、御幣物を奉奠、御祭文を奏上せしめられる、最も重要且、荘厳な祭典である。

また一面においては、「尚武祭」「熱田祭」ともいって、数々の奉納行事が催され、名古屋市民挙って、この良き日をことほぎまつる、まことに親しみある祭ともいい得る。

祭典の次第は、午前九時、御幣物辛櫃を先頭にして勅使以下、宮司以下祭員、総代の順に列次を整えて参進、本宮石階下西側の祓所に至り修祓、終って本宮に参進する。

本宮の祭儀では、開扉、献饌、祝詞奏上（宮司）御幣物奉奠、祭文奏上（勅使）撤饌、閉扉、拝礼があり、総代、各界代表、崇敬者代表が参列する。



例 祭



南 新 宮 社 祭

「神饌品目」

盛飯、荒稲、神酒、餅、海魚、川魚、野鳥、水鳥、海菜、野菜、果物、塩、水ならびに特殊神饌の「まがり」「ぶと」「しとき」、香物、御箸一膳。

奉納行事は、花火、巻藁献灯、演芸、文芸、弓道、柔道、相撲、剣道、献茶、献花、能、棒の手等である。

南新宮社祭

六月五日

摂社南新宮社（祭神・素盞鳴尊）で行われる疫病除けの祭儀で、「御芦祭」とも称する。

その起源は詳かでないが、江戸中期の文献によれば、六月四・五・六の三日間社頭で行われたもので、四日は舞楽を奏し、五日は供御を行い、各酒肴を賜わり、六日は即ち御芦祭で、前日社頭に飾った吉乗物・凶乗物（俗に「みよ

し」という)を御池に流したものである。また、この祭典に奏上する祝詞にも、「寛弘年間に悪疫が流行し、多くの人々が悩み苦しんだ。そこで当時の村人等が大神の御前に旗鉾を飾い、疫病除けの祈願をこめたところ、恩頼も著く、さしもの疫病も退散してしまった。村人等は大変喜んで、それ以降は毎年お祭を執り行うようになった。後の世に至っては、御芦祭とも称し、笛吹き、鼓打ち、山車をも曳並べて御神慮を和め奉った。このように古い手振りに神習い奉って、今日お祭を執り行うのである。大神の御神徳によって、疫病の禍事がないように御護理下さい」といった意味の言葉がある。

現在では殿内及び社頭に芦を奉飾し、六月五日午後三時、禰宜以下奉仕して祭典を行う。

なお、この祭典に引続き、末社八子社(祭神・天忍穗耳尊・天穗日命・天津彦根命・活津彦根命・熊野櫛樟日命・田心姫命・市杵島姫命・湍津姫命)、末社曾志茂利社(祭神・居茂利大神)の御前においても祭典が行われる。

「芦の奉飾」について

長さ	一束の数	繩にて結ぶ箇所	奉飾	束数
二尺五寸	二〇本	五	殿内 前日午後殿内に納む。前年納めた芦は殿内より出し、向拝長押上左右に立てかく	二
三尺六寸	一八本	三	八子社 各二本を左右の柱に立てかく 曾志茂利社	四

四尺八寸	一八本	三	南新宮社の階の左右の柱に立てかく	二
四尺	同	同	芦台に立つ	一二
一束宛に四垂の紙垂を付す				計 二〇

(付記) 社頭に奉飾した芦は、南新宮社の殿内より取り出した芦と共に、祭儀終了後、これを御池に流す。

「芦迎の儀」(現今この儀なし)

六月四日午前九時、芦迎所役一員並びに白丁一員、青衾神社(当神宮撰社・祭神・天道日女命)に至り、予め氏子によって社前に置かれた芦を受けて帰る。芦の授受は祭員ならびに氏子、終始無言の裡にこれを行うを例とする。

御田植祭

六月十八日

撰社御田神社(祭神・大年神)で行われる五穀豊穰を祈る祭儀である。

祭典は当日午前十時、権宮司以下祭員が奉仕して執行するが、斎主の祝詞奏上に次いで陪從の笏拍子につれて白衣・緋袴・緋襷に、芙蓉の挿頭花をつけ神(玉苗を付す)を採った早乙女四員の優雅な田舞が奏せられる。

神前には、斎田に植える玉苗を献ずる。

田歌

陪從笏拍しを打ちつつ之を唱う
 若種う多うよ 苗種う多うよ 女の手に手を
 とりて ひろろむ とるとよ やレ／＼
 さみだれに みすそぬらして うゆる田を
 きみが千とせの みまくさにせん やレ／＼
 みましもしげや 若苗とる手やは
 白玉なゆらや とみくさのはな やレ／＼
 福万ごくに本国へ うゑちらし 手に手を
 とりてひろろむとるとよ やレ／＼

なお、六月第四日曜日には緑区にある摂社氷上姉子神社の大高斎田においても、御田植祭が行われる。

神輿渡御神事

八月八日

朱雀天皇天慶二年（九三九）平将門が下総に

謀叛した時、藤原忠文・源経基は勅を奉じ、征討におもむく途中、熱田神宮に逆賊誅伐の祈願をこめた。ために神輿は、愛知郡星崎の邑に渡御あらせ給うた。その霊験あつて、将門は下総国辛島に亡んだという。

この故事にならって、毎年八月八日に、神輿は摂社「孫若御子神社」（祭神・天火明命）に渡御せられたが、戦後は事情により、午前十時、本宮において祭典を行うのみで、神幸の儀は中絶のまま今日に及んでいる。



大高斎田御田植祭



御田神社御田植祭

第六章 宝

物

一 書画・什器

熱田神宮の宝物は、総数四千余点に上るが、うち「国宝」及び「重要文化財」に指定されているのは次の通りである。

後花園天皇宸筆御消息

一幅

紙本墨書

足利義教自筆御内書

一幅

紙本墨書

熱田社領を後崇光院貞成親王に御譲進になった際の勅書および内書であって勅書は後花園天皇十五才の時の宸筆である。將軍義教自筆の内書も勅書内容との交渉を示し、相まってその御真蹟たることを確証する。宸筆の内容次の通り。

永享五年十二月十二日（御花押）

尾張国熱田社領事、御知行候へく候。室町殿

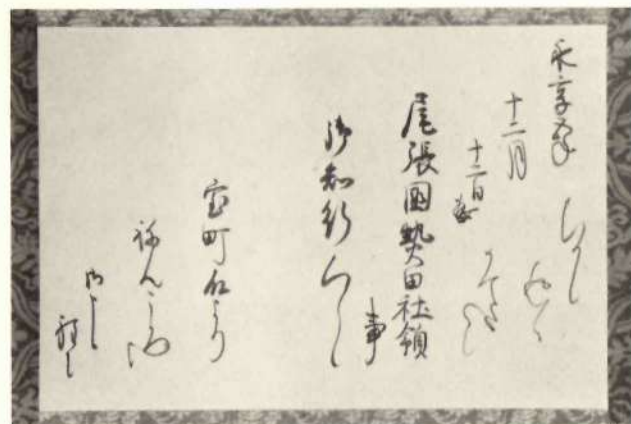
よりねんころに御申候程に参らせ候。返々めてたく候。

法華經涌出品

一卷

紙本着色

紙本着色され、筆蹟および見返しの絵から見ると、厳島神社の平家納経、大阪四天王寺の扇面古写経など平安末期の装飾画と同一類型のものであるが、その製作年代は恐らく鎌倉初期と見るべきであろう。表紙に金銀切箔をおき、その間に蓮華唐草文様を切金をもつて表現し、松桜藤などに人物を配した極彩色の絵をもつてし、経文は天地に金銀の砂子切箔を散らし、緑青の二条界線を引いた料紙、肉太の書体と、細勁な書体とを、二行にへだてて交互に書写している。見返しには、松樹のならぶ丘や土坡、それを廻る清流、野に遊ぶ人物など大和絵風の極



後花園天皇宸翰



法華經涌出品

二 木造舞樂面



面王陵

舞樂は奈良時代のはじめに大陸から輸入され、いまなお、宮中や大きな社寺などに伝えられている。熱田神宮の舞樂面は、製作年代を平安末期から鎌倉期に属するものと推定せられ、いずれも優作で、伎楽面や能楽面に見られない良さと象徴化が見ら

れ、舞の律動美にこたえ得る誇張的な面である。治承二年修覆のものが一番多く、ついで弘安七年、応永二十七年のものなどがある。

面王陵 一面

修理銘（朱漆）面裏の中央上部に「新面」、右側に「弘安七〇〇〇〇〇」左側に「御社園事

頭上に竜をいただき、顔は瞋目で鼻は高く、吊顎は吊り下り上下の歯をむき出した容貌の面である。竜の頭部には剝落の跡があるが、これは宝塔がつけられていたものであろう。

面の素材は桧で、もともと全体が黄金色であったが、現在では眼の廻りに若干残るだけであ

る。両眼と顎とは別材で作られており、動眼・吊顎となっている。

舞樂蘭陵王は、左方舞（唐樂）で、舞樂の中で最も代表的なものの一つである。中国北齊の王子蘭陵王（羅陵王とも云う）が、出陣に際し兵士の士気を鼓舞するため、ことさらに恐ろしげな仮面をつけて戦に臨んだ故事に由来する。

面王陵 二面



面王陵 二面

その一 修理銘（朱漆）面裏の右側に「治承二年戊戌 青陽天」左側に「応永廿七年卯月九日」その二 修理銘（朱漆）面裏の右側に「治承二年戊戌 青陽天」「応永廿四年卯月九日」兵庫

〇〇〇〇

この面は薄手の桧材で造られ耳の下で九ミリ程度であり、又彫りも丹念である。動眼で目を見開き、鼻はやや上向きかげんで額・眼尻に皺を寄せ、吊顎で大きな牙をむき出している。両面とも彩色は、ほとんど剝落し、額部には布目があらわれている。顔を白緑青、口唇を朱、そして牙と歯列には金箔を押した跡が認められる。

舞楽納曾利は、双竜舞ともいい二人舞の曲で、一人舞の時は落蹲おちつくまという。右方舞（高麗楽）で竜の舞う姿である。

還城楽

一面

修理銘（朱漆）面裏の右側に「治承二年
青陽天修覆之」「弘安七年甲申次朱明天重修覆
矣」左側に「御社神事之外不可口他所矣」

額の筋肉は、こぶのように盛り上り、眉は太く突き出し、おちくぼんだ両眼、幾重にも折り重なった頬の皺、雄大な鼻、大きな歯をむき出した面貌である。

材質は桧材であるが、両眼から両頬、鼻、上唇までは別材で作って、これを庇のような眉の下にさし込んで、上下に動く様工夫がなされている。

舞楽還城楽は、右方一人舞の曲で、胡人が蟠蛇ばんだを捕える様子を踊るものである。



還城楽面

二の舞 二面

翁 修理銘（朱漆）面裏の右側に「修覆之」

姫 修理銘（朱漆）面裏の右側に「治承二年
青陽天」左側に「社神事之外」

翁面は、小さく目を細め口をあけておかしくうに笑う老爺の面で、額・頬・口辺に皺を寄せ上下の歯を出している。姫面は、みにくく腫れ上がり、舌を出して苦しめあえぐ表情の老婆の面である。材質は、いずれも桧材の上に目の粗い麻布を貼り漆をかけて彩色されているが、漆はほとんど剥落している。

舞楽二の舞は、左方舞「安摩」の次に舞うもので、安摩のまねをして滑稽な舞をすることから、俗に「二の舞を踏む」という諺の語源になっている。



二の舞面

その一 修理銘（朱漆）判読不明

その二 修理銘（朱漆）面裏の右側に「年戊戌次

青天安朱明左側に、「

團事之外不可出

その三 修理銘（朱漆）面裏の右側に「年戊戌次

團因修理之、弘安七年甲申次朱明天重修覆矣」左

側に「御社神事之外不可出所」

その四 修理銘（朱漆）面裏の右側に「治承二年戊戌次青天修理之 弘安二年己卯次朱明天重

修理之」

鳥の面貌に作られ、口ばしを尖らせ、その両口元には肉垂れを大きな花弁型にあらわし、また額には幾条もの皺を刻んでいる。

材質は、その二が桐材で、あとの三面は松材を用いている。布貼りの黒漆地に緑青彩色を施し、

眼・鼻孔・頬は朱で、瞳は漆箔をぬっているが、いずれも剝落が甚しい。

舞楽崑崙八仙は、右方舞（高麗楽）の四人舞で冠鶴が楽しげに舞い遊ぶさまを表わしている。



崑崙八仙面

抜頭

一面



抜頭面

裏書（朱漆）剝落不明

頭の鉢が大きく、額が秀いで眉をつり上げ、目につくり、大きなき鼻で、口をやや開き、顎は細くひきしまっている。

材質は松材で、素地に麻布を貼って、顔面にみことな朱漆を塗り、頭部の地肌にも及んでいる。

紐状の頭髮はわずかに根元を残すだけである。

舞楽抜頭は左方（林邑楽）一人舞で頭髮を振り乱

して格闘する様を写したものと云われる。

貴徳 一面

修理銘（朱漆）面裏の右側に「治承年戊戌次青陽天修理之」弘安二年戊戌次朱明天重修覆之」

左側に「御社神事之外出他所」

瞋目で眉根を寄せ鼻は高く、口をやや開いて上下の歯を出している。材質は松材で、素地に布を貼り、その上に漆で下地を施し緑青で彩られていたと思われるが、現在では全体に薄く痕

跡を留めるのみで、下地の漆が露われ、はなはだ黒ずんだ面になっている。

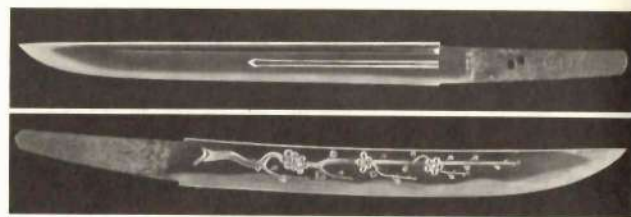
舞楽貴徳は、右方舞（高麗楽）一人舞の曲で、太刀を佩き鉾を持って舞う勇壮な舞で番子（従者）を二人従える。

三刀 剣

熱田神宮は三種の神器の一である草薙神剣を奉斎するところから、宝物中に刀剣類は極めて多い。

宝刀は、古刀から現代刀にまで亘る。古刀の刀身に彫られた施入銘は日光二荒山奉納の刀剣に見るだけで、刀剣研究史上からも非常に貴重な資料である。

なお神社仏閣に奉納された刀剣類は、一般に作者が著名で時代の古いものが多く、自然名作の名にかくれて正真の名刀に乏しく、そうでなくても、どこか欠点のあるものが多いといわれるが、当神宮所蔵のものは比較的に名刀が多いといわれる。然も現在これだけの宝刀、名作を残している神社は極めて稀であり、刀剣史上貴重な宝庫である。



俊（上）
来 国 康
継（下）

国宝

短 刀 銘

来国俊
正和五年十一月日

長さ二五・一センチ・内反り

来国俊は山城の名工来太郎国行を祖とする同派で、国行の子に国俊と二字に銘するものがあって世に「二字国俊」と称せられ、弘安の年紀がある。来国俊と三字銘のものは、古来二字国俊同人とも或は別人とも称せられているが、徳川美術館の蔵刀に正和四年七十五歳と銘のある来国俊があってこれによれば二字国俊は同人となり、この短刀は七十六歳の作となる。平造内反尋常の姿で直刃を巧みに焼き、地刃の出来最も優れ且健全無比である。

金銅鶴丸文散兵庫鎖太刀

長さ九五・三センチ

永仁第七曆（一二九九）施入の銘がある。

兵庫鎖太刀は平安末期から鎌倉時代にわたって武家の間に流行したもので、帯袂が鎖状となっており、長覆輪を施しに

もいかめしい拵であるところから贗物造太刀とも称せられている。もともこの太刀は鍔金の美しいものであったが、殆ど剝落している外は、鶴丸紋を散らし、俵鋳を一、二欠失しているほか殆ど完存のもので、棟の覆輪に毛彫で施入銘があり、永仁第七暦の年紀は特に貴重である。

銘文は次の通り。

尾州春日郡 安食上庄鎮守 八剣大明神 清滝権現

長尾天神 禱奉施御剣

永仁第七暦己亥 三月廿二日 勸進唯心房円空

この種のもので製作年紀や施入銘のあるものは他に例がない。

太 刀 銘 則 国

長さ七二・七センチ 反り二・七センチ

則国は国友の子で藤右馬允と称し父につぐ名工である。則国在銘の太刀は極めて少く、まれに短刀もある。この太刀はやや小振りのものであるが、時代及び系統の特色を示した名刀である。

太 刀 銘 宗 吉 作



兵 庫 鎮 太 刀

(切付銘) 奉納熱田大神宮直繼

応永二十六年六月十七日

長さ八一・二センチ 反り三・二センチ

太 刀 銘 宗 吉 作

アツタシンモツヲカサワラサマノセウ

(切付銘) 興昌天正三年正月吉日

興昌天正三年正月吉日

長さ七八・六センチ 反り二・七センチ

宗吉は備前福岡一文字派の刀工で、宗国の子、則宗の婿となり、初め新太郎、後に左近将監といった。後鳥羽院の御番鍛冶にかぞえられ、隠岐国御番鍛冶中の一人である。細身で小鋒詰り、腰反りの高い太刀姿は鎌倉初期までに見られるところであり、小丁子に小乱が交り、沸ついた刃文もこの刀の特色を示している。同名の現存するもの数口中、この二口はいずれも傑れた出来である。

太 刀 銘 備州長船兼光

(朱銘) 天明五巳七月奉納

本三州之士尾州矢田作十郎助吉帶之

長さ六九・七センチ 反り一・五センチ

備前長船の刀工で、父子四代文永の頃から応永のころに至る。いずれも名匠をもって名高い。兼光は長船景光の子で、長光の孫である。作刀は元弘・正慶等の年紀のあるものが最も古く、あたかも親景光の作に見るとき片落互の目を焼き太刀姿も尋常である。同二代を延文兼光と称し、灣れを主調とし、身幅が広く大鋒の仰山な作風である。初二代の切れ目を果してどこにおくかは頗る問題であるが、その初代を相州正宗十哲の一人とすることは俄かに賛成し難い。

脇指 銘 長谷部国信

長さ四〇・九センチ 反り〇・八センチ

短刀 銘 長谷部国信

藤原友吉

長さ二二・四センチ 反り〇・三センチ

長谷部は国重、国信の両工殆ど時代を同じくして技を振っているが、その本国は大和と伝え、国重は相州正宗十哲の一人にかぞえられている。しかし国重、国信ともに延文の年紀があり、同名相継いで室町時代に及んでいる。脇指は古来「熱田国信」と称せられて高名のものであり、身幅の広い寸延びの造達は時代の流行であり、皆焼と称せられる焼刃は南北朝時代の相州物に始まり、同工の最も得意とするところでもある。短刀は時代の下るものと鑑せられ小振りのもので、藤原友吉は所持者の名であらう。

太刀 銘 国友

長さ七五・六センチ 反り二・四センチ

国友は粟田口国家の長子で、弟に久国、国安、国清、有国、国総があり、皆それぞれに名工の誉が高く、国友を始め久国、国安、有国、国総はいずれも後鳥羽天皇御番鍛冶に列せられている。国友在銘の現存するものは極めて少く、細身小鋒の優美な太刀姿は時代を物語り、小沸、小乱の出来は時代及びこの派の特色である。勅命により御劔「乙丸」を作成したのも国友であり、左衛門尉を受領し、老後藤林と号した。

太刀 銘 長光

長さ七二・〇センチ 反り二・三センチ

長光は備前長船派祖、光忠の子で同派の名工であり、鎌倉時代の刀匠中最も多く作刀が現存する。同名二代あり、初代、文永に始まり、二代は正安以後の年紀がある。法名は順慶、世に「順慶長光」といわれる。

太刀 銘 備前長船重光

長さ八二・四センチ 反り三・九センチ

重光は長船兼光の門と伝え、その有銘確実な作刀の現存するものは頗る少い。この太刀は長大なもので南北朝末期のものである。

剣

銘 吉光

長さ二二・四センチ

吉光は則国の子或は国吉の子とも伝えてあるが、鎌倉中期の粟田口派の名工として最も名高く、江戸時代には日本刀中第一位の列にあった。その最も得意とするところは短刀の製作であって、太刀は極めて少く、ついで剣を得意としている。小振りで頭が張らず、平肉が豊かでころっとした感じの剣が多い。

この剣は遺憾ながらやや研疲れた感はあるが、銘はよろしく姿も上品である。世に「藤四郎吉光」と称せられる。

短

刀

銘

国光

徳治三年（以下切）

長さ二七・九センチ

国光は粟田口国綱の子と伝え、「新藤五」と呼ばれている。世上短刀の名手として粟田口吉光と並び称せられているが、国光同名数工あるものごとく、銘振にもやや相違があり、伎倆にも甲乙がある。しかしその代数や個人を明らかにしない。この短刀はやや寸延びのもので、遺憾ながら疲れどころがあるが、銘文に示すように製作年代を明かにしている点は貴重である。

太

刀

銘

了戒 嘉元三年三月 日

山城国住人九郎左（以下切）

長さ八二・五センチ 反り三・〇三センチ

了戒は来国俊の門人であり、師の作風を継承して太刀、短刀に見るべきものがある。この太刀には「九郎左」の俗名及び嘉元三年（一三〇五）の年紀があつて、同工研究の上から貴重な資料である。反りの深いのは時代の特色で、手肉が豊かにつき、肌が細かに詰り、地一面に秋霜のように厚く沸の置いたのと、刃文が直刃であるのは、来国俊、国友、則国等と同様に山城鍛冶の特色である。

太

刀

無銘

伝真長

長さ八四・五センチ 反り三・二センチ

真長は初代長船長光の門人で、師に迫る伎倆があり、長光銘の作刀の中にも、同工の代作が相当数含まれている。真長の作風は長光に比して一段と匂口が締り、最も直刃を得意として、丁子を主調とした乱刃は少く、且つ長光程の華麗さもない。

この太刀は生ぶ茎で無銘であるが、出来優れ且つ健全な良刀で所伝を納得出来る。

太

刀

銘

真行

(切付銘) 熱田大明神奉寄進之

元龜二年辛未八月八日 大久保与九郎
長さ七二・七センチ 反り二・一センチ

真行は江戸時代の銘鑑には所載がない。その時代は鎌倉を下らず、その作風から鑑て伯耆の真行であろう。元龜二年(一五七二)の施入銘も明瞭である。総体にやや細身ながら腰反り、踏張りもあり、地肌最もつまり、刃文は常には見慣れぬ一種の乱れで地刃ともに特に沸が多い。

脇指

銘

(葵紋) 奉納尾州熱田大明神
兩御所様被召出於武州江戸御剣作
御紋康之字被下罷上刻籠越前康継

長さ三五・一センチ 反り〇・五センチ

康継の本国は美濃と伝え、越前に在住した刀鍛冶であるが、文禄中、肥後大塚に任じ、下坂と銘した。慶長中、徳川家康、同秀忠兩將軍から召出されて江戸に於て御剣を鍛えたが、その伎倆を認められて葵紋を基にすることを許され、更に家康から康の一字を賜って康継と称した。以来江戸と越前の間を隔年ごとに往復したという。

この脇指は江戸に召されて名譽を施した帰路、熱田神宮に詣で、鍛刀一口を奉納して神宮の籠物としたものである。

剣

銘 為清

(切付銘) 熱田太神宮宗久

長さ二七・三センチ

為清は鎌倉初期の備前一文字派の刀工である。その在銘確實なものは現在頗る少く、剣は特に珍しい。この剣は地刃の出来傑れ、銘振も見事である。当社宝剣中随一である。

剣

銘 □ 利(包利)

長さ二二・七センチ

包利は大和手掻派の刀工で鎌倉末期から同名があるが、この剣は姿形よく、柃目の鍛に地沸をつけ、直刃に小乱を交えはつれかかり沸出来の刃文は鎌倉時代を下らない。銘はやや朽ち込んで分明でないが、包利であろう。なかなかの名剣である。

太刀

銘 元弘三年六月一日 実阿作

文禄二年乙未五月五日 郎守勝

□ 寄進熱田太神宮 □

長さ八三・三センチ 反り三・七センチ

実阿は筑前国彦山の修験者とも伝え、又談議所関係の僧とも伝えている。正宗十哲の一人である左文字の親であるが、その作風は左文字とは全く趣を異にし、九州物の伝統的作風を示している。実阿在銘の現存するものは極めて少く、しかも元弘の年紀は貴重であり、同作中の優品である。

四和鏡

和鏡は殆ど全部が室町時代の作で、和鏡としては全盛期を過ぎたものであるが、時代の基準となる紀年銘鏡が多いこと、また蓬萊文鏡がその大多數を占めることは、和鏡の研究に貴重な資料となる。

松竹双鶴文円鏡

面径三二・二センチ 一面
径 四〇・九センチ 一合
高さ一二・九センチ

桐鳳凰蒔絵鏡箱

円鏡は白銅鑄製の大型鏡で、鏡背の意匠は、中心に花菱亀甲文の亀紐を据え、鏡背全面には洲浜に松竹双鶴を配して蓬萊の図を表わしている。

鏡箱は合口造円形の内に懸子を納め、蓋表には梨地に高時絵で、桐竹に鳳凰の図、蓋裏と身の外底および懸子の内面には梨地中に次の蓬萊蒔絵鏡箱の意匠と同



松竹双鶴文円鏡

じ松竹鶴亀の図を研出し、懸子の外底には梨地中に七羽の松喰鶴を散らしている。身の内に縁地蟹牡丹文倭錦を貼る。

松竹双鶴文八稜鏡

面径二六・三センチ 一面
径 二八・八センチ 一合
高さ 七・三センチ

蓬萊蒔絵鏡箱

八稜鏡は円鏡と同じく白銅鑄製、鏡背の意匠は花菱亀甲文の亀紐をつけ、界圈は菱花式鏡の特徴を表わしているが、それにとられず蓬萊の図を表わしている。

鏡箱は合口造八稜形で蓋表に洲浜に松竹鶴亀を添えて蓬萊の情景を表わし、蓋裏と身の外底懸子の内外には梨地中に松喰鶴を研出す。身の内に紅緑段地椿唐草文倭錦を貼る。

松竹双鶴文八稜鏡

面径二六・三センチ 一面
径 二八・八センチ 一合
高さ 七・三センチ

蓬萊蒔絵鏡箱



松竹双鶴文八稜鏡

鏡箱の図様の構成は前者と稍異なるが、主題の扱いと形態は全く同じである。身の内に紅縁段地唐草鳳凰丸亀甲文倭錦を貼る。

桐鳳凰時絵鏡箱における豪宕なる趣、蓬萊時絵鏡箱における各種時絵技法の応用は大いに注目すべきものがある。

五馬具

金銅装唐鞍 一具
附黒漆鞍 二背

唐鞍・黒漆鞍共に神事に用いられたもので、唐鞍は神馬の飾り用、黒漆鞍は五月五日の神輿渡御神事の折、朝使に做った郷代（卿代）・補代両頭人用である。唐鞍は、鏡鞍・銀面・轡・鐙・杏葉や鈴を付けた胸繫、雲珠を付けた鞆など一揃がととのっている。



蓬萊時絵鏡箱

六古神宝類

長祿二年（一四五八）の御遷宮にあたり、將軍足利義政が、相殿神である五神に奉納したと称する。男神の御衣三領、女神の御衣二領より成る。室町時代のものだが、平安時代以来の伝統的な技術によっており、中世の公家服飾様式を伝える貴重な遺品とされている。中でも文羅の裳二腰は羅の織技が、応仁の乱を境としてまったく衰亡してしまう直前のものとして極めて価値ある資料である。



表 着

御衣

表 着 二領
萌黄小葵地桐竹鳳凰文二重織

二領とも萌黄小葵文地に桐竹鳳凰の二重織を用いて単に作り、ひねり仕立としている。

重

桂

十襲二領

白桐竹鳳凰唐草文固綾織

二領とも白地桐竹鳳凰唐草文固地綾を用いて単のひねり仕立とし、一領は上部より三枚二枚三枚二枚。他の一領は二枚三枚三枚二枚の順に合せ縫いを施した計十襲を一領としている。

単

一領

萌黄地繁菱文固綾織

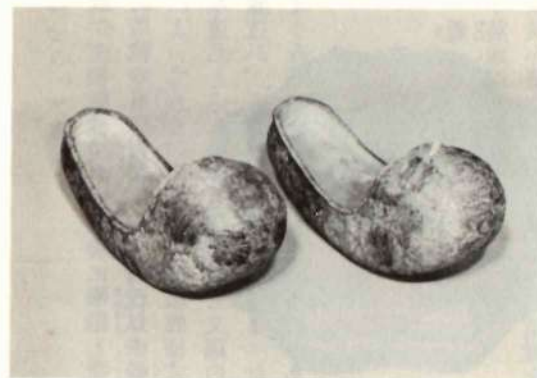
萌黄地繁菱文固地綾を用いて単仕立とし、身袖八ツ口に作っている

裳

二腰

白三重襴文羅織

二腰とも身に白地三重襴文羅を用いて八幅仕立とし両端にあがちのを設け、大腰引腰はいずれも白窠霞文二重織物を用いている。



錦包挿鞋

彩絵松扇

三握

松材、三十六橋の表裏を胡粉地とし、伊号は表裏に松竹群雀、呂号は紅梅、白梅等、波号は嶋嶼に香蒲にとまる一羽の翡翠等の彩絵を施し、蟹目に簾を用いて石畳に結んでいる。

表袴

三腰

白窠霞文二重織

三腰とも身の表及び紐に白地窠霞文二重織を用い、白平絹を中階に裏は紅地の平絹とし、相引は白撚糸の千鳥掛に、白左右撫の腰立を施している。

襪

二双

白繁菱文固綾織

表裏いずれも白地繁菱文固地綾を用いて袷仕立としている。

錦包挿鞋

三双

いずれも紙芯に萌黄地牡丹唐草文錦をもって貼り包み、白地繁菱文固地綾の沓敷を張り納めている。

入帷

二領

紫小葵地浮線綾二重織

表は紫地小葵文浮線綾、裏は紫地遠菱文紗を用いて二幅仕立としている。

朱塗唐櫃

二合

二合いずれも覆蓋造り、内外とも朱塗、裏面は黒塗として六脚を付し、脚固めを施す。蓋蝶番付曲金、壺金具、脚頂金、杵金等はすべて平金具を用い、各脚には菱笠鉾を打つ。二合とも蓋上に唐花三窠の据文を施す。一合のみ箕の子造りの懸子を納め海老鏢を付す。

黒漆根古志形鏡台

五基

当社五柱の御祭神の調度で、一の御前から五の御前までの五基が保存されている。木製黒漆塗りで、白銅金具を施した根古志形鏡台で台は二つの球形轂の五方に根古志足五枚を出し、さらに支足二枚ずつで挟んでいる。

この種の鏡台は奈良の春日大社に現存するだけの数少ない遺品である。

黒漆菊亀甲蒔絵冠箱

一合

長方形の印籠蓋造りの冠箱で、四隅を入隅とし、甲盛りのある蓋と四側が張りのある曲線をつくられ、蓋の縁を太い紙捻で置き合せとしている。松材を用い、総体に黒漆塗りで横長の入亀甲の中に十六弁の菊花を配した菊亀甲文を錫平蒔絵で散らしている。

身側面に「公方綱吉再興」の黒書銘があることから、貞享三年（一六八六）の遷宮の折、修理したと考えられる。

黒漆平胡録

一腰

木製の黒漆塗りで、背板・方立ともに金銅覆輪を巡らしている。背板は無角の裾広がり、左右縁寄りに前緒・後緒の孔がある。方立は金銅板金張りで同覆輪を施し、底には三列九行の孔をあけた矢配板を重ねている。前板には、牡丹花文を毛彫りした金銅の円形金具を鋲留めに据えている。

朱漆弓

三張

楓の木を用いた丸木弓で、総朱漆塗りとしている。両端には本弭・末弭の金銅金具を付け、弣下に剣樋を掻いている。弣金具および塗りの剝落がみられるが、古式を残す弓として注目されている。

第七章 附属团体

熱田神宮の崇敬者の集いである各種の附属団体は、それぞれ目的達成のため目覚ましい活動を展開している。

奉 賛 会

熱田神宮を敬仰し、報恩の誠を捧げると共に、社運の隆昌を図る目的で、名古屋市内の崇敬者を結集した団体であって、目的達成のため次の事業を行う。

- 一、神徳の宣揚
 - 一、祭典奉賛に関する事業
 - 一、供進金の奉献
 - 一、その他必要な事業
- この会の結成は昭和二十年である。

熱 田 講

神徳の宣揚と、社運の隆昌とを図る目的の下に、全国各地の崇敬者を結集して組織した団体で、次の諸事業を行って、神宮の発展を期する。

- 一、神徳の宣揚
- 一、春秋二季講社大祭を執行して、講員の家内安全、家業繁栄の神楽、祈禱を斎行する。
- 一、講員に特別神符を頒布する。

- 一、講演部並に文化部を設置する。

- 一、その他適切な事業を行う。

この組織が出来たのは、昭和二十一年四月である。

入講手続については、附近に支部がある場合は、その支部を通じるのが便利であるが、直接本部に申込まれてもよい。

講員に加入されると講員証を交付する。講員には毎年神符ならびに御供物を授与する外、講社大祭に案内し、相当の待遇をすることになっている。

豊 年 講

愛知県下の篤農家が相寄って農作物の増産に励むと共に、社運の隆昌を図る目的で、昭和二十四年三月結成された団体である。

- 一、年中祭典の神饌米麦の奉献
- 一、農業感謝祭の開催（十二月農林畜産物品評会の開催）
- 一、講演会及び篤農家体験発表会の開催
- 一、農業技術の研究
- 一、分科（種芸、園芸、畜産全般）研究会の開催等、農事振興関係の各種事業を行う。

神御衣奉献会

御衣祭に、大神の御衣を奉製する奉仕は、熱田神宮奉賛会御衣奉献部が行ってきたが、昭和三十年の遷宮を機とし、奉賛の実を挙げるために、熱田神宮神御衣奉献会が新に設立せられた。会員は県下の繊維関係業者及び御衣縁故者で、神恩奉謝と奉仕の真心を通じて繊維文化の向上を図るを目的としている。

一、神御衣御料の謹製

一、御衣祭御料奉献使の詮衡並に奉仕

一、御衣の奉献

一、御衣祭趣旨の徹底化

敬神婦人会

熱田神宮を崇敬する団体で、婦徳の涵養に努め、会員相互の親睦を図るを目的として、昭和二十三年十二月に結成された。

一、祭典神事、教化事業等の補助

一、各種作業の奉仕

一、各種芸能の奉納

一、講演会、講習会及び研究会の開催

桐竹会

附属団体のうちで最も古く、昭和十九年結成され、舞楽神事、神輿渡御神事の奉仕を始め祭典の奏楽奉仕を目的とする会で、その技術練磨のため講習会、定例研究会等の事業も行われている。この種の雅楽奉仕団体は、全国にその例を見ないもので、現在愛知、岐阜両県下に多数の会員をもっている。

朱鳥会

熱田社家の人々が、社家としての正しい自覚と固い結束とをもって卒先奉仕の赤誠を捧げ、社運の隆昌を図り、神恩に応え奉らんとする会で、祭典行事その他必要に応じ、神宮の指図によって奉仕する。

献茶会

境内に茶室を設けて、名古屋茶道の本地を築き、広く各流の同好の士が会同して神前献茶の奉仕、月次茶会、その他の行事を行い、茶道を通じて神徳を宣揚したいという趣旨のもとに、昭和二十二年十月発会し、その後目的達成のために多くの会員の参加を得て年々盛大に発展をとげつつある。

よもぎ花道会

花道会は広く各流の同好の士が会同して、献花の奉仕、月次献花等の行事を行い、花道を通

じて神徳を宣揚したいという趣旨のもとに、昭和二十四年十月発会し、会員の参加を得て、四季折々の生花が献ぜられている。

刀剣保存会

熱田神宮所蔵の刀剣の保存、伝承と研究鑑賞を目的として、昭和四十一年十二月結成された団体である。

献菊会

菊花を愛好する者を以て組織し、献菊を通じて神徳の顕揚と社運の隆昌とを図ると共に、会員相互の親睦を目的とする会で、菊花の奉献、斯道振興に関する研究会等の事業を行う。

えびす講社

摂社上知我麻神社を崇敬する者をもって組織し、神徳の宣揚と、社運の隆昌とを図る目的で昭和二十五年十月結成された団体である。

高座稲荷講社

末社高座稲荷社を崇敬する者をもって組織し、神徳の宣揚と社運の隆昌とを図る目的で昭和二十五年三月結成された団体である。

青年つるぎ会

熱田神宮を崇敬する青年の会で相互の親睦と研修につとめ、立派な日本人として清く明る

く正しい世の中を造る目的で昭和四十年十一月結成された団体である。

みのり会

会員の研鑽と農業の振興に寄与することを目的とし、熱田神宮農業功労者顕彰を受けた者により平成元年七月に結成された団体である。

ボーイスカウト・ガールスカウト

ボーイスカウト名古屋第二十三団、第五十六団、ガールスカウト愛知県第二十五団、第百四団が結成され、種々の訓練や奉仕に励んでいる。ボーイスカウト第二十三団が始めて結成されたのは、昭和三十八年四月二十九日。第五十六団は昭和四十五年五月十日。ガールスカウト第二十五団は四十一年六月十二日。第百四団は昭和六十一年五月四日に結成された。

児童合唱団

児童の音楽性を高め明朗な人格を養成するため昭和四十四年九月七日結成された。

附一

熱田神宮年表

861	859	850	847	846	845	833	822	807	708	
二月 清和貞観三年	正月 清和貞観元年	九月 文徳嘉祥三年	三月 仁明承和十四年	十月 仁明承和十三年	九月 仁明承和十二年	六月 仁明天長十年	二月 嵯峨弘仁十三年	平城大同二年	元明和銅元年	十二月
遷宮行われ										
別宮八剣宮鎮座										
斎部宿祢広成例幣に預からんことを奏請す										
神階四位下に叙せらる										
神階三位に叙せられ神封十五戸を寄す										
尾張浜主和風長寿楽の舞を奏す。時に百十三才										
尾張浜主奏舞、時に百十四才										
尾張国府。神宮寺この頃創建										
勅して神戸の百姓に公役を免ぜらる										
神祇權少祐卜部業基をして賀瑞の由を告げしめらる										
神階正三位に昇叙。										
神階正二位に昇叙										
神階正二位に叙せられ神封卅戸を寄す。右中弁大枝朝臣音人を以て神宝を奉らしめられる。この頃正一位に昇叙か										
861						794	718	710		
宣明曆を用う						京都に遷都	養老律令成る	奈良に遷都		

686	668			紀年
六月 天武朱鳥元年	天智七年戊辰	崇神 垂仁 景行	天皇年号	
天照大神御弟素盞鳴尊、八岐大蛇より獲た神剣を献上。天照大神は天孫降臨の際、天璽之神宝として皇孫瓊瓊杵尊に授け給う。天照大神を大和笠縫邑に祭り神器を移す。天照大神の宮を伊勢五十鈴川上に建てる。日本武尊熊襲を討ち、川上梟帥を誅す。ひきつづき東夷を征す。駿河焼津において火難に遭われ、神剣の靈威により賊を掃蕩。これより草薙神剣と申す。尾張国氷上乎止与命の館に滞留、宮貴媛命を妃とせられる。日本武尊伊勢国能褒野において薨ぜらる。白鳥陵に葬る。熱田神宮この頃創建せられ尾張の正統相つぎ尾張国造は熱田祠官をかねて国人の婦依を集む。				事
新羅僧道行ひそかに神剣を盗むことを図る。神剣を宮中より再び熱田社に収められ永く宮城の鎮護とせらる。社守七員を置き、内一人を長とし六人を別とし、以後尾張氏人を神主・祝とする。				項
701	694			紀年
大宝律令成る	藤原宮に遷都			通史

1441	1433	1420	1419	1412	1377	1336	1333	1299	1284	1279	1238	1213
後花園嘉吉元年十二月	後花園永享五年十二月十二日	称光応永二十七年四月九日	称光応永二十六年六月十七日	後小松応永十九年二月二日	後田融院永和三年十一月	後醍醐建武三年八月三十日	後醍醐元弘三年五月	後伏見永仁七年三月二十二日	後宇多弘安七年	後宇多弘安二年	四条曆仁元年十月	建保年中
太刀銘国友奉納	後花園天皇宸翰	舞楽面（修理銘）	太刀銘宗吉奉納。將軍足利義持重修	蓬萊鏡刻銘	熱田日本書紀同紙背和歌奉納（永和元、三年）	官社停止せらる	特に官社に列せらる	兵庫鎮太刀鞘刻銘	舞楽面（修理銘）	舞楽面（修理銘）	將軍藤原頼経参詣の上奉幣を行う	太刀銘則国奉納
					1338	1334					1232	
						足利幕府開く	建武中興				貞永式目成る	

1194	1178	1165	1147	1017	1004	966	907	900	890	874
後鳥羽建久五年九月二十八日	高倉治承二年	二条永万元年	近衛久安三年六月二十二日	後一条寛仁元年十一月	一条寛弘元年十月十四日	村上康保三年三月二十二日	醍醐延喜七年	醍醐昌泰三年四月二十七日	宇多寛平二年十月十五日	清和貞観十六年
源頼朝奉幣	舞楽面（修理銘）	熱田社系百両を進む	三十番神の曆名に一日熱田太明神とあり	一代一度の大奉幣に預る	尾張守大江匡衡大般若經を書写供養す。妻赤染衛門管絃を奉る	正一位熱田太明神の記録あり	藤原時平延喜式を奉る。名神大社として、熱田・日割御子・孫若御子・高座結御子の四社、四座。小社として上知我麻・下知我麻・御田・八剣・氷上姉子・青衾の六社六座が預る。いづれも、当神宮摂社なり。その神税穀は弁官の報を待って社用に充てしめらる	太政官符	貞観熱田太神宮縁起、重ねて筆削を加え朝廷に献す	熱田太神宮縁起
1192	1159	1156				939		908		
鎌倉幕府開く	平治の乱	保元の乱			平将門乱を起す			延喜格を施行す		

1818	1795	1772	1747	1736	1722	1705	1687	1686	1684	1677	1662	1655
九月二十三日	仁孝文政元年 十二月五日	光格寛政七年 十二月五日	後桃園安永元年 十二月三日	桜町延享四年 十二月十五日	桜町元文元年 七月二十一日	中御門享保七年 十二月二十六日	東山宝永二年 十二月二十六日	靈元貞享三年	靈元貞享元年	十二月	後西寛文二年	後西明暦元年
尾張家徳川齊朝重修	尾張家徳川宗睦重修	尾張家徳川宗睦重修	尾張家徳川宗睦重修	尾張家徳川宗勝重修	尾張家徳川継友重修	尾張家徳川吉通重修	尾張家徳川吉通重修	松尾芭蕉参拝「笈の小文」	徳川綱吉重修。左右楽所、春敵門、その外改修	吉川惟足願文	尾張家徳川光友重修	尾張家徳川光友重修
			1754				1687		1684			1639
			宝暦暦採用				生類憐みの令		貞享暦作る			鎖国

1629	1600	1595	1591	1575	1571	1560	1530	1517	1484	1479	1458	1445
三月	後水尾寛永六年	後陽成慶長五年	五月	後陽成文禄四年	後陽成天正十九年	正親町元亀二年	正親町永禄三年	後奈良享禄三年	後柏原永正十四年	御土御門文明十六年十一月十一日	後土御門文明十一年三月	後花園長禄二年
後水尾天皇宸筆御神号	徳川家康重修 鎮皇門加藤清正改修	太刀銘実阿奉納	豊臣秀吉重修	小笠原興昌太刀銘宗吉奉納	織田信長重修 海上門改修 太刀銘真行奉納	信長塀奉納	この頃享禄古図成る	將軍足利義植重修	蓬萊鏡	沙門清徳勸進状	古神宝類奉納、將軍足利義政重修	蓬萊時絵鏡箱
1603	1600										1467	
徳川幕府開く	関ヶ原の戦										応仁の乱起る	

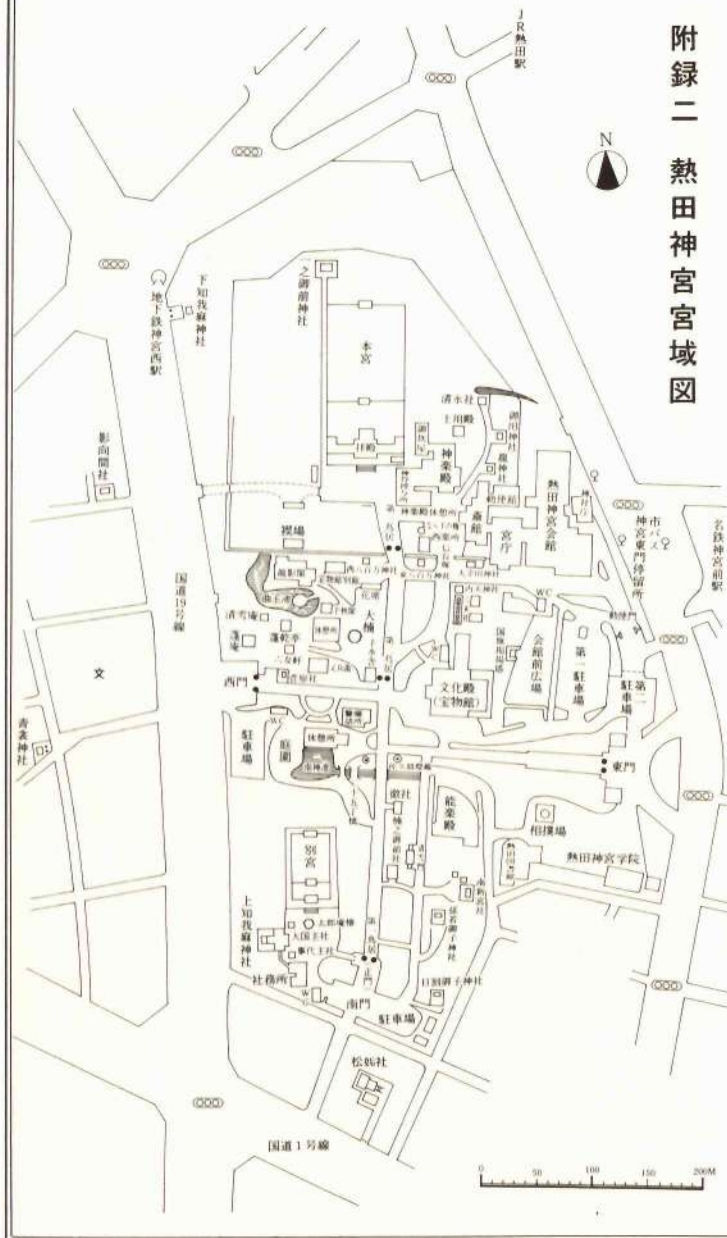
1950	1946	1945	1945	1937	1935	1919	1917	1916	1915	1910
昭和二十五年 四月三日 十月二十九日	昭和二十一年 十月二十四日	昭和二十年 十二月十五日	昭和二十年 五月十七日	昭和二十二年 七月六日	昭和十年 十一月一日	大正八年	大正六年 二月一日	大正五年 四月五日	大正四年 十月一日	明治四十三年 十一月十八日
義宮親王殿下（常陸宮）御参拝 昭和天皇皇后陛下（皇太后陛下）御参拝	昭和天皇御参拝	神道指令	空襲により被災	皇太后陛下（貞明皇后）御参拝	遷宮	境域拡張工事行われる	勅祭社治定せらる	大正天皇御参拝 皇后陛下（貞明皇后）御参拝	皇太子殿下（昭和天皇）御参拝	皇太子殿下（大正天皇）御参拝
	1946		1941							
	官国幣社廃止 日本国新憲法 成る		大東亜戦争始 まる							

1906	1898	1893	1880	1878	1877	1876	1871	1868	1866	1842
明治三十九年 十月十八日	明治三十一年 十月十一日	明治二十六年 四月二十六日	明治十三年 七月二日	明治十一年 十月二十八日	明治十年 五月十二日	明治九年 十一月二十九日	明治四年 五月十四日	明治元年 六月九日	孝明慶応二年 九月五日	仁孝天保十三年 九月二十二日
皇太子殿下（大正天皇）御参拝	皇太子殿下（大正天皇）御参拝	遷宮神明造に改修	明治天皇御参拝	明治天皇御参拝	皇太后陛下（英照皇太后）御参拝	皇后陛下（照憲皇太后）御参拝	官幣大社二十九社の一に列せられる	熱田神社の社号を改め、神宮号を宣下 明治天皇行幸 神祇官直支配社二十八社の一に列せられる	尾張家徳川義宣重修。木曾山の木材を用う。 修造免田三八五町余歩	尾張家徳川齊莊重修
		1889					1872	1867		
		大日本帝国憲 法成る					太陽曆採用	大政奉還		

1994	1993	1991	1988	1979
平成六年 十一月二日	平成五年 十一月一日	平成三年 四月六日 十月二十八日	昭和六十二年 九月十九日	昭和五十四年 十一月七日
紀宮清子内親王殿下御参拝	皇太子殿下御参拝	皇太子殿下御参拝 天皇皇后両陛下御参拝	三笠宮寛仁親王殿下御参拝	皇太子妃殿下（皇后陛下） 紀宮清子内親王殿下御参拝

1979	1978	1969	1968	1965	1962	1960	1958	1957	1956	1955	1952
昭和五十四年 五月二十八日	昭和五十三年 四月四日	昭和四十四年 四月四日	昭和四十三年 三月二十八日	昭和四十年八月 二十七日	昭和三十七年 十月二十六日	昭和三十五年 五月二十四日	昭和三十三年 四月十四日	昭和三十二年 四月十日	昭和三十一年 四月三日	昭和三十年 三月二十九日 十一月十一日	昭和二十七年 六月二十四日
昭和天皇皇后陛下（皇太后陛下）御参拝	礼宮文仁親王殿下（秋篠宮）御参拝	浩宮徳仁親王殿下（皇太子殿下）御参拝	皇太子同妃両殿下（天皇皇后両陛下）御参拝	常陸宮同妃両殿下御参拝	昭和天皇皇后陛下（皇太后陛下）御参拝	皇后陛下（皇太后陛下）御参拝	義宮正仁親王殿下（常陸宮）御参拝	昭和天皇皇后陛下（皇太后陛下）御参拝	清宮貴子内親王殿下御参拝	皇太子殿下（今上陛下）御参拝 遷宮	高松宮同妃両殿下御参拝
											1951
											対日平和条約

附錄二 熱田神宮宮域図



平成九年十二月二十日 印刷
平成九年十二月三十日 発行

名古屋市中熱田区神宮一ノ一

編集並
発行所

熱田神宮宮庁

電話代表 四一五一番

印刷所

西濃印刷株式会社

電話代表 五六一一番

名古屋営業所